曲川遺跡発掘調査概要報告書

2007 年度調査

2009.12

財団法人 元興寺文化財研究所

曲川遺跡発掘調査概要報告書

2007年度調査

2009

財団法人　元興寺文化財研究所

例言

1．本書は、曲川遺跡における発掘調査の成果の概要をまとめたものである。
2．調査地は奈良県橿原市曲川町 457 － 2、470 － 1、502 － 1 番地ほかに所在し、開発対象面積 32,896.4㎡のうち発掘調査面積は 2,900㎡である。
3．調査は奈良県教育委員会及び橿原市教育委員会から依頼を受けた㈶元興寺文化財研究所が、平成 19 年 4 月 9 日～ 7 月 25 日まで現地での作業を実施し、藤井章徳が担当した。整理及び報告書作成作業は、調査後速やかに開始し、平成 21 年度をそれに充てた。
4．調査地の実測及び写真撮影は藤井・福山博章（奈良大学卒業生）が行い、榊真麻（奈良大学）の協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、仲井光代・武田浩子・奥田智代・福山が担当した（所属は当時）。
5．調査地の基準点測量は世界測地系 2000 を利用し、水準は T.P である。測量及び図化業務は㈱アコードが担当した。
6．本書の執筆は第 1 章を佐藤亜聖、第 2 章を藤井章徳、それ以外を村田裕介が担当した。
7．遺構写真の一部については掘内保彦氏（掘内保彦事務所）による画像補正を行った。
8．遺物の詳細については、紙幅の都合上、巻末の表にまとめた。
9．本書の編集は村田が行った。

目次

第 1 章　調査の経緯と体制 ……1
　第 1 節　調査に至る経緯 ……1
　第 2 節　調査体制 ……1

第 2 章　調査地の位置と周辺の調査 ……2

第 3 章　調査の成果 ……6
　第 1 節　基本層所 ……6
　第 2 節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物 ……7
　第 3 節　古代以降の遺構・遺物 …… 22
　第 4 節　包含層出土の遺物 …… 26

第 4 章　総括 …… 26

関連資料
　検出遺構略則図・遺構仮番号配置図
　掲載遺物一覧
　検出遺構および出土遺物一覧

写真図版

第１章　調査の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯

平成18年３月に株式会社大和流通経済研究所（代表取締役 田村耕一）より、奈良県教育委員会教育長宛てに発掘の届出が提出された。隣接地ではこれまでに弥生時代中期から古墳時代前期の周溝墓群等がみつかっていることから、発掘調査が必要との判断がなされた。

その後、平成19年３月、工事内容の変更に伴い届出の変更が行われ、これを受けて奈良県教育委員会、橿原市教育委員会、㈶元興寺文化財研究所で協議を行った。その結果、㈶元興寺文化財研究所が調査を受託することに決定、平成19年４月、㈱大和流通経済研究所と当研究所の間で発掘調査委託契約を締結した。発掘調査に関わる費用は㈱大和流通経済研究所が負担した。

重機、作業員、測量図化等は㈱大和流通経済研究所が手配し、平成19年４月16日調査に着手、７月25日現地調査を終了した。

遺物整理作業および報告書作成作業は現地調査終了後、平成21年１月に整理・調査概報作成業務契約を締結、速やかに着手した。現地調査および整理過程では、㈱大和流通経済研究所の協力をいただき、また奈良県教育委員会、橿原市教育委員会には随時適切な指導を賜った。関係者各位に深くお礼申し上げたい。

第２節　調査体制

発掘調査及び整理・報告書作成は次の体制で実施した（所属は当時）。

調査指導：奈良県教育委員会・橿原市教育委員会

調査主体：㈶元興寺文化財研究所

理事長　　辻村泰善
所　長　　坪井清足
事務局長　奥洞二郎
研究部長　狭川真一
人文考古学研究室（考古担当）
室　長　　伊藤健司
主任研究員　佐藤亜聖
研究員　　藤井章徳（現地調査）
研究員　　村田裕介（整理・報告書作成）

現地作業員：㈲ワーク

調査補助員：福山博章（奈良大学卒業生）、榊真麻（奈良大学学生）、仲井光代・武田浩子・奥田智代（人文考古学研究室）

調査及び整理にあたり、次の方々から指導・助言をいただいた。感謝申し上げます。（敬称略：所属は当時）
西藤清秀（奈良県教育委員会）、齊藤明彦・濱口和弘・平岩欣太・松井一晃（橿原市教育委員会）

第２章　調査地の位置と周辺の調査

曲川遺跡の所在する奈良県橿原市は、奈良盆地の南辺に位置する。市域の南部から東部には、本馬山から貝吹山・香久山を経て鳥見山へと至る山地が南西から北東方向を主軸として横たわる。山地の間には河川等による風化花崗岩の侵食と耕地拡大のための人為的改変が加わった結果、樹枝状の地形を呈する開析谷地形が形成されている。市内を流れる河川は、西から順に曽我川、高取川、桜川、飛鳥川、米川、寺川等がほぼ等間隔にあり、緩やかに北へ向かって傾斜する地形とともに北流している。こうした河川の堆積作用により、橿原市域北・中部は扇状地と自然堤防を伴う沖積地を形成している。

橿原市の中部、大和高田市との市境界付近に曲川遺跡は所在する。遺跡範囲は遺跡名の由来となっている曲川池を中心とする直径約 400 ～ 700m にわたる地域が想定されている。現在の行政区分では、曲川町、新堂町、雲梯町、忌部町などに当たり、旧金橋村の広範囲に及ぶと考えられている。

沖積地上に立地する曲川遺跡は、東の曽我川、西の葛城川に挟まれた標高 61.3m の平担に立地する。曲川池の北東から南方にかけて条里地割の乱れが確認できることから、旧流路の存在が推定できる。大和高田市境界付近から曲川町にかけて北北東方向に伸びる幅 30 ～ 50m の帯状の高まりは、旧流路に伴う自然堤防であると考えられる。奈良盆地全体がそうであるように、曲川周辺地域も吉野川分水の通水以前は水不足が深刻な問題であった。この問題を解決するべく、1879 年に曲川村民の合力によって曲川池が築造された。しかし、2002 年に埋め立てられ、現在は大型ショッピングセンターに姿を変えている。

曲川遺跡周辺では国道 24 号線橿原バイパスの建設に伴う発掘調査や京奈和自動車道関連の発掘調査など、近年盛んに発掘調査が実施されている地域である。

当地域において、縄文時代以前の遺構を伴う遺跡はあまり知られていない。橿原市西曽我遺跡では、縄文時代中期の遺物包含層が確認されており、橿原市東坊城遺跡では後期から晩期の土坑が検出されている。大和高田市西坊城遺跡では、土壙墓と考えられる晩期の土器を伴う土坑が検出されている。

弥生時代には曽我川、葛城川流域を中心として多くの遺跡が確認できることから、当地域において積極的な土地開発が行われたと考えられる。曽我川中流域に所在する橿原市中曽司遺跡は、東西 200m、南北 300m の範囲と推定され、前期から後期にわたって溝、住居跡などの遺構が検出されている。このため、中曽司遺跡はこの地域における拠点的な集落であったと考えられている。橿原市新沢一町遺跡、橿原市千塚山遺跡では中期の住居跡が検出されている。橿原市西曽我遺跡、橿原市土橋遺跡では中期から古墳時代にわたって周溝墓が造営されている。貝吹山から派生した独立丘陵である忌部山に所在する橿原市忌部山遺跡では、弥生時代後期の住居跡や溝が検出されており、高地性集落が営まれたと考えられる。

古墳時代全般においては、曽我川流域で多くの遺跡が形成されることから、大規模な開発がなされていたことが窺える。曽我川左岸に立地する東坊城遺跡では、古墳時代前期から中期と考えられる大溝が検出されている。この大溝より古墳時代前期から中期の土師器、初期須恵器の他、鋳造鉄斧、鞴羽口等の鍛冶関連遺物、滑石製の勾玉、管玉といった祭祀関連遺物が出土していることから、付近に大規模な集落の存在が推定されている。大和高田市西坊城遺跡では、中期から後期の水田と掘立柱建物が検出されており、部分的ではあるが、古墳時代の集落が確認されている。橿原市曽我遺跡では、中期から後期の玉類、石製模造品の未成品、砥石が大量に出土し、玉造りを専業的に営んだ大規模な生産遺跡として著名である。橿原市西曽我遺跡では、中期の土坑が検出されており、曽我遺跡との関連が指摘されている。

古墳時代の特徴的な遺跡として大規模な古墳の造営がある。曲川遺跡の近隣には、前期の前方後円墳である橿

原市スイセン塚古墳と中期の前方後円墳である橿原市鳥屋ミサンザイ古墳が所在している。曽我川上流域には総数 600 基以上の新沢千塚古墳群が 4 世紀から 7 世紀まで連綿と造営が続いており、渡来系の文物を多く有することでも有名である。また、近年の発掘調査の増加により、周辺地域の埋没古墳の検出も増加している。大和高田市松浦北遺跡では中期～後期の古墳周溝および、多種類の埴輪を検出している。同遺跡西方の三倉池から後期の木棺が 6 基以上出土したことは著名である。中期から後期の古墳である橿原市四条古墳群や橿原市四条シナノ古墳群では、大量の木製品が出土したことで注目されている。このように、低地部にも古墳群が造営されており、今後の調査の増加により古墳の数も増加することが予測される。

飛鳥時代以降では曲川遺跡周辺には顕著な遺跡は確認できない。7 世紀後半には藤原京が造営されるが、近年の調査成果による京域復元案では、曲川遺跡は藤原京西京極より西方へ約 1km 隔てている。曲川遺跡の北方には古代の官道である横大路が東西に通っており、今日でも横大路推定線と重複して橿原市の市道が東西に走る。

旧大和国内には統一条里が施行されたことが明らかとなっており、今日でも各所で明瞭な土地区画痕跡を残す。曲川遺跡周辺で認められる南北に縦断する旧河道を境に、西に葛下郡、東に高市郡路西条里が復元されている。

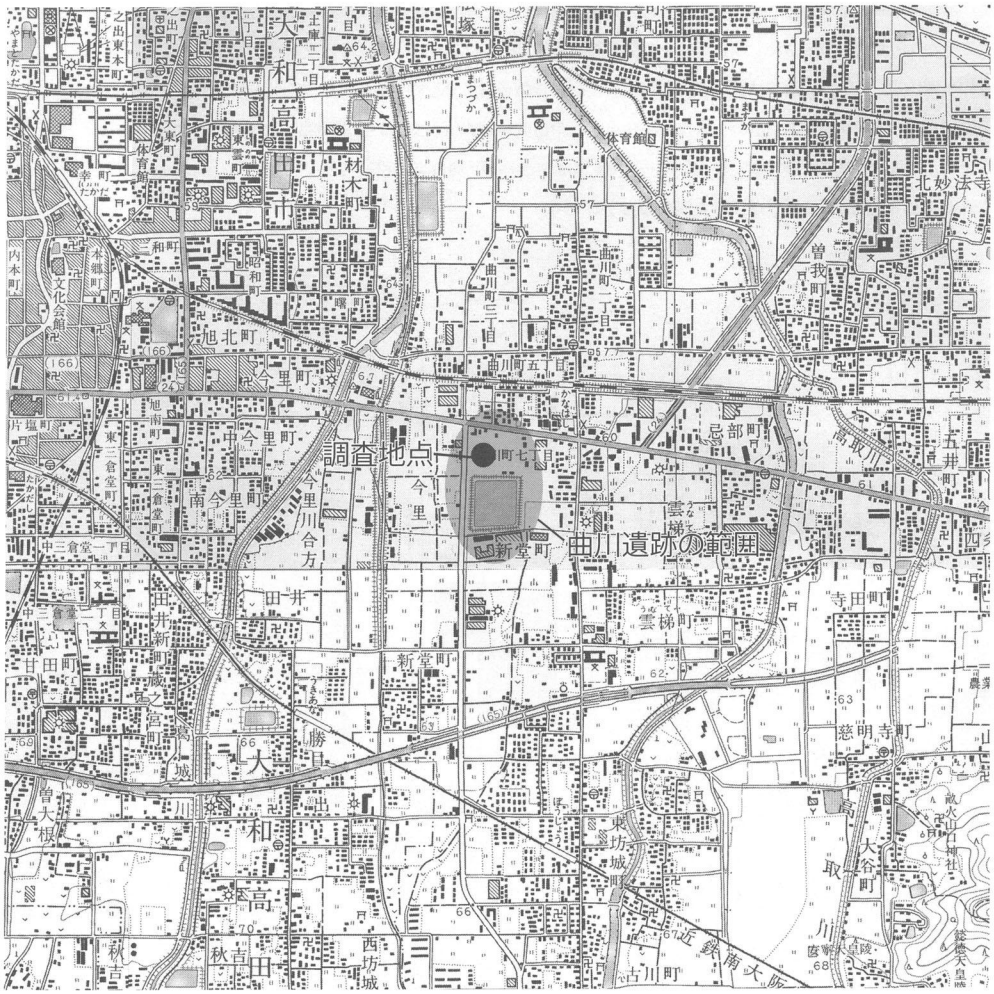


図１　調査地の位置（S：1/25,000）

橿原市西曽我遺跡では平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸、耕作跡などが検出されている。この調査成果が示すように、平安時代以降から中世を通じて高市郡においては、多くの荘園が出現している。荘園の多くは一乗院門跡領、大乗院門跡領を主とする興福寺領である。詳細な地点は不明であるが、おおまかな位置は遺存地名により推定可能である。西に曲川庄、横大路をはさんで南に忌部庄があり、曽我川をはさんで東に曽我庄、北に中曽司庄が存在したと考えられる。

室町～戦国時代には東坊城、新堂、忌部、曲川などに環濠集落が形成され、現集落の原型となっている。橿原市芝の前遺跡では室町時代の墓地跡が検出されており、環濠集落と墓地とのありかたを考えることができる。

参考文献

石野博信 1973「大和の弥生時代」『考古学論攷』奈良県立橿原考古学研究所

改定橿原市史編纂委員会 1987「橿原史市　本編下巻」

関川尚功 1988「芝の前遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 53 冊　奈良県立橿原考古学研究所

佐藤良二ほか 1989「曽我遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 55 冊　奈良県立橿原考古学研究所

大西貴夫ほか 1999「西坊城遺跡」奈良県文化財調査報告書第 83 集　奈良県立橿原考古学研究所

伊藤雅和・岡田憲一 2003「西坊城遺跡Ⅱ」奈良県文化財調査報告書第 90 集　奈良県立橿原考古学研究所

北山峰生・松井一晃 2005「曲川遺跡」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 90 冊 奈良県立橿原考古学研究所

藤井章徳ほか 2006「曲川遺跡発掘調査報告書　2004 年度調査」㈶元興寺文化財研究所

佐々木好直 2007「曲川遺跡Ⅱ」奈良県立橿原考古学研究所

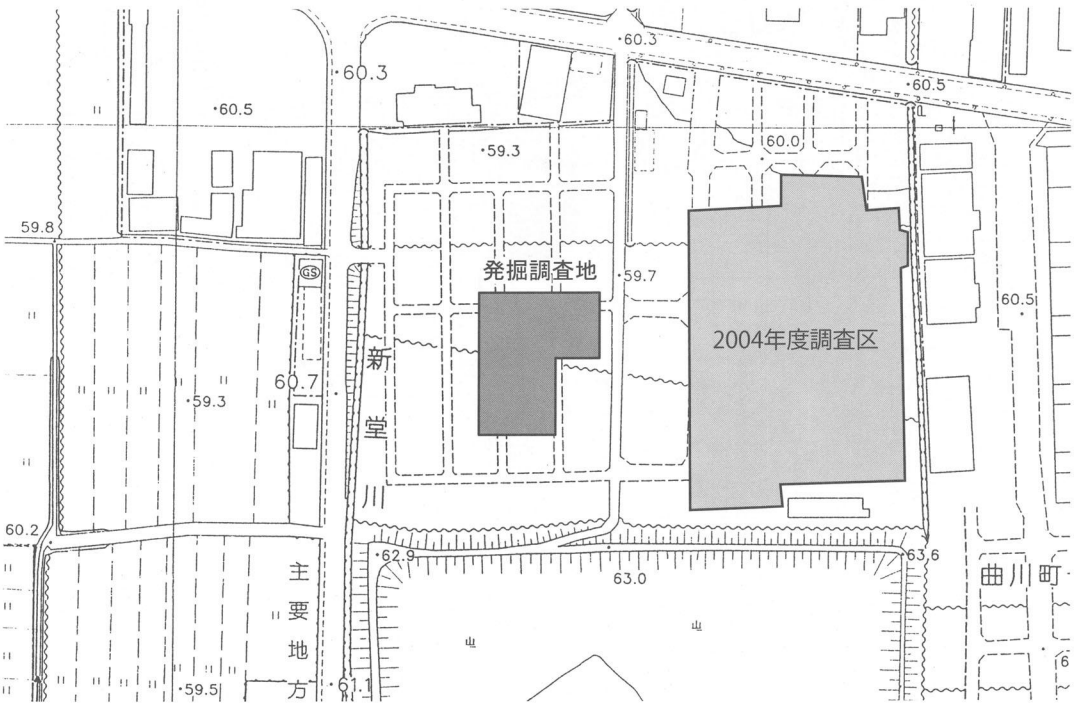


図 2　今回の調査地点と 2004 年度調査区の位置（S：1/1,000）

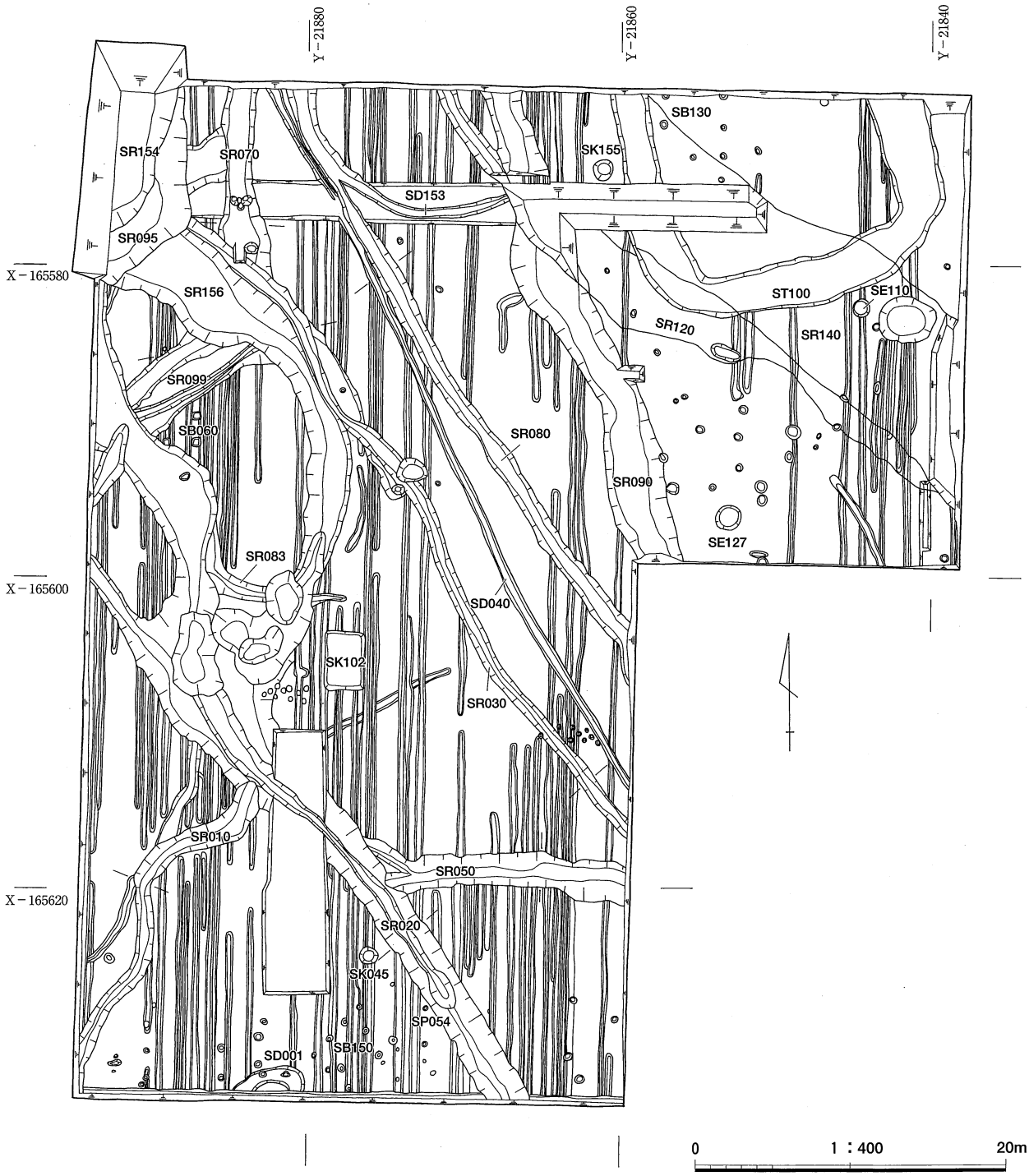


図３　遺跡全体図（S：1/400）

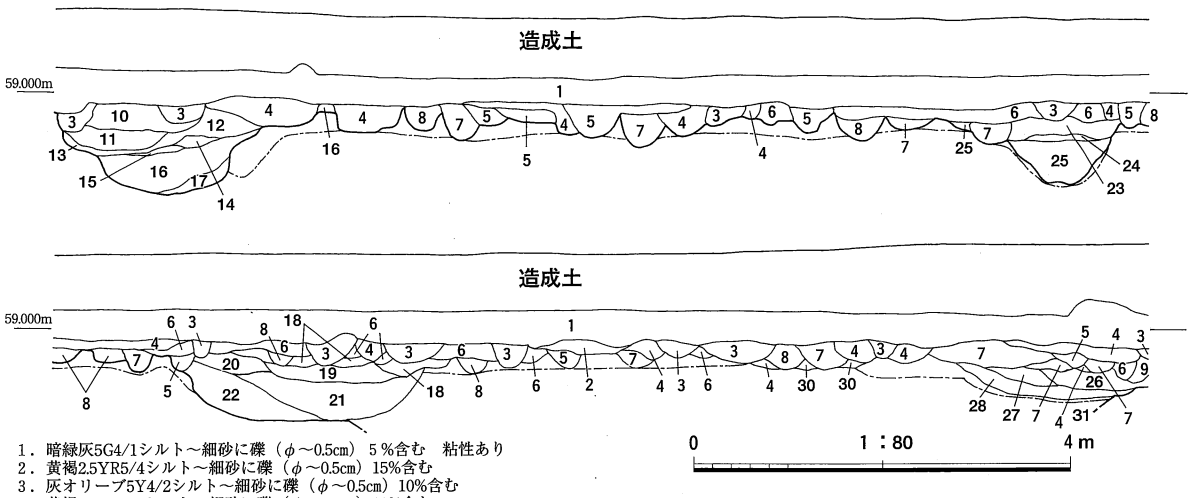
第３章　調査の成果

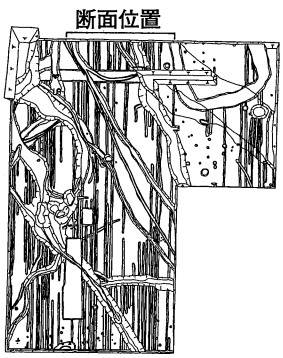
第１節　基本層序

調査地内は、表土下約 50cmにわたって、粗礫を主体とする造成土が施され、その下層には近世末期以後と推測される水田にともなう耕土とみられる青灰色粘質土が 50cmほど堆積している。この下層より瓦器等を含む中世の包含層（暗褐砂層）が 20cmほどの厚さで堆積している。中世の遺構は、暗褐砂層を除去した段階で検出されるが、その多くは、洪水砂と考えられる厚さ 20cmほどの堆積（灰白砂層）直上に形成されている。この灰白砂層下層には、古墳時代初頭までの土器が含まれる包含層（黒褐砂層）が堆積している。

調査区内の層序に対する以上のような認識に立脚した上で、調査は２面の遺構面を対象として実施し、第１遺構面は暗褐砂層直下の遺構、第２遺構面は灰白砂層・黒褐シルト層直下の遺構を対象とした。但し、調査期間の関係上、第１遺構面は、遺構掘削はおこなわず、検出のみに止め、第２遺構面調査後には、下層遺構の確認のため調査区の一部にトレンチを設けて第３遺構面として調査を行った。

本概報では、第２遺構面で検出された遺構を中心に報告する。





1．暗緑灰5G4/1シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 5％含む　粘性あり
2．黄褐2.5YR5/4シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 15%含む
3．灰オリーブ5Y4/2シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 10%含む
4．黄褐2.5YR5/3シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 10%含む
5．オリーブ褐2.5Y4/3シルト～細砂
6．灰オリーブ5Y5/3シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 15%含む
7．暗灰黄2.5Y4/2シルト～細砂
8．オリーブ褐2.5Y4/3シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 10%含む
9．黄褐2.5YR5/4シルト～細砂
10．灰黄褐10YR4/2シルト～細砂
11．にぶい黄2.5Y6/2細砂
12．暗灰黄2.5Y5/2細砂～中砂
13．黄褐2.5YR5/4細砂～中砂
14．褐灰10YR5/1シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 10%含む
15．黄灰2.5YR4/1中砂～粗砂に灰N4/0シルト～細砂を斑状に10%含む
16．暗青灰10BG4/1シルト～細砂に黄褐2.5YR5/3中砂を斑状に30%含む
17．褐10YR4/6中砂～粗砂
18．黒褐10YR3/1シルト～細砂に礫（φ～0.5cm） 20%含む
19．灰黄2.5Y6/2中砂～粗砂
20．暗灰黄2.5Y5/2細砂～中砂
21．黄灰2.5Y4/1シルト～細砂にオリーブ褐2.5Y4/6細砂を斑状に５％含む
22．灰黄2.5Y7/2細砂～中砂
23．灰黄2.5Y7/2中砂～粗砂ににぶい黄褐10YR5/4中砂～粗砂を斑状に15%含む
24．灰白2.5Y7/1中砂
25．黄灰2.5Y5/1シルト～細砂
26．オリーブ黄5Y6/3シルト～細砂　しまり良い
27．褐灰10YR4/1シルト～細砂　粘性あり
28．暗灰黄2.5Y4/1シルト～細砂　木炭を斑状に10%含む
29．褐灰10YR4/1）シルト～細砂に褐10YR4/6細砂を斑状に20%含む
30．灰黄褐10YR4/2細砂～中砂に礫（φ～0.5cm） 5％含む
31．灰黄2.5Y6/2中砂～粗砂

図４　調査区北壁土層断面図（S：1/80）

第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

方形周溝墓

ST100（図５・６）

AM～AU－２～７区において検出された溝である。北側が調査区外となり全体像は不明だが、検出範囲での平面形はＵ字形を呈し、幅は約2.2～3.5ｍを測る。底部断面形態は浅いＵ字形を呈し、深さ約0.2～0.3ｍである。埋土は概ね２層からなり、上層より黒色シルト、灰白色シルトである。埋土の様子から湛水状態での堆積が想定される。平面形態及び埋土の堆積状況から周溝墓を巡る周溝であると考えられる。この場合、周溝墓としての規模は、東西幅14ｍ、南北幅12ｍ以上であり、墳丘主軸は北東を志向する。

遺物は甕（1、3）、高杯（2）が出土しているが、全般に希薄である。南東隅より出土した３は、出土状況から完形であったことが想定される。出土層位は黒色シルト層である。墳丘上あるいは周溝外に配置された土器が、周溝が若干埋没した段階で周溝内に脱落し、その後埋没したものと考えられる。

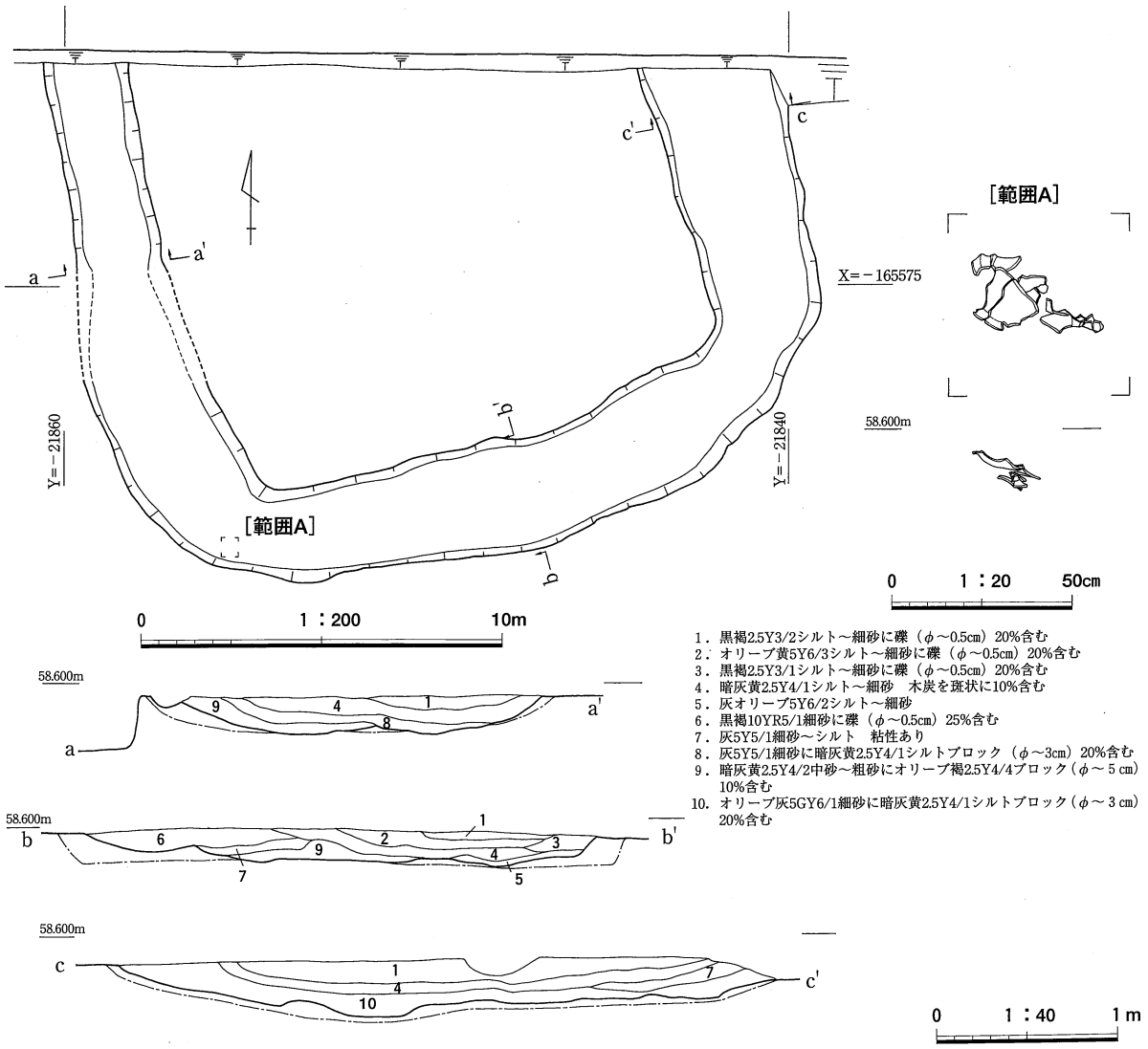


図５　ST100平面図（S：1/200）・土層断面図（S：1/40）・遺物出土状況図（S：1/20）

出土した土器の年代より、弥生時代後期末の築造と考える。

掘立柱建物

SB150（図 7）

AG ～ AI － 22 ～ 23 区において検出された掘立柱建物である。建物主軸は北東―南西を指向し、梁行 1 間、桁行 3 間である。柱間は梁行 1.3 ～ 1.5 m、桁行約 3.2 mである。柱掘方は直径約 40㎝の円形を呈し、抜取穴径は 20㎝前後である。周辺には関連する施設等は確認されず、性格は不明である。

遺存状態が良好な遺物はほとんど出土せず、造営年代は不明だが、調査区内で検出されたその他の建物主軸が正方位に乗っているのに対して、大きく偏向し、多くの自然流路の方向に直行する主軸を持つこと、及び、埋土の色調が、その他の建物に比べて暗く、弥生時代後期末の遺構と考えられる SD001 の埋土に近いことを考慮すると、SB150 も同様な時期が想定できる。

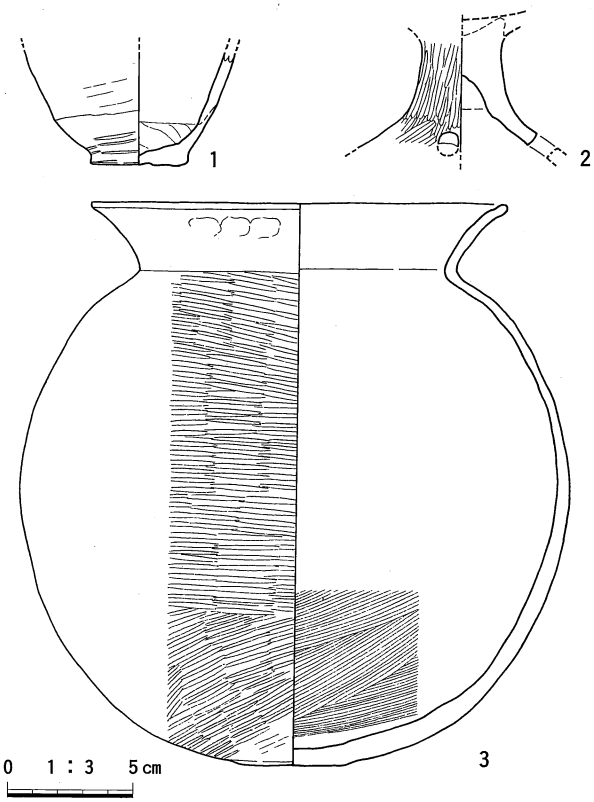


図 6 ST100 出土遺物実測図（S：1/3）

井戸

SE127（図 8・10 － 4 ～ 17）

AP － 11 区において検出された素掘りの井戸である。掘方の平面形は円形を呈し、直径約 1.5 m、深さ約 1.2 mを測る。埋土は概ね 2 層からなり、上層より黒褐色砂、黒色シルトである。

遺物は上層の黒褐色砂より、壺（4）、甕（5 ～ 7）、鉢（8、9）、高杯（10）、下層の黒色シルトより、壺（11）、甕（12 ～ 14）、高杯（15、16）、杭？（17）が出土

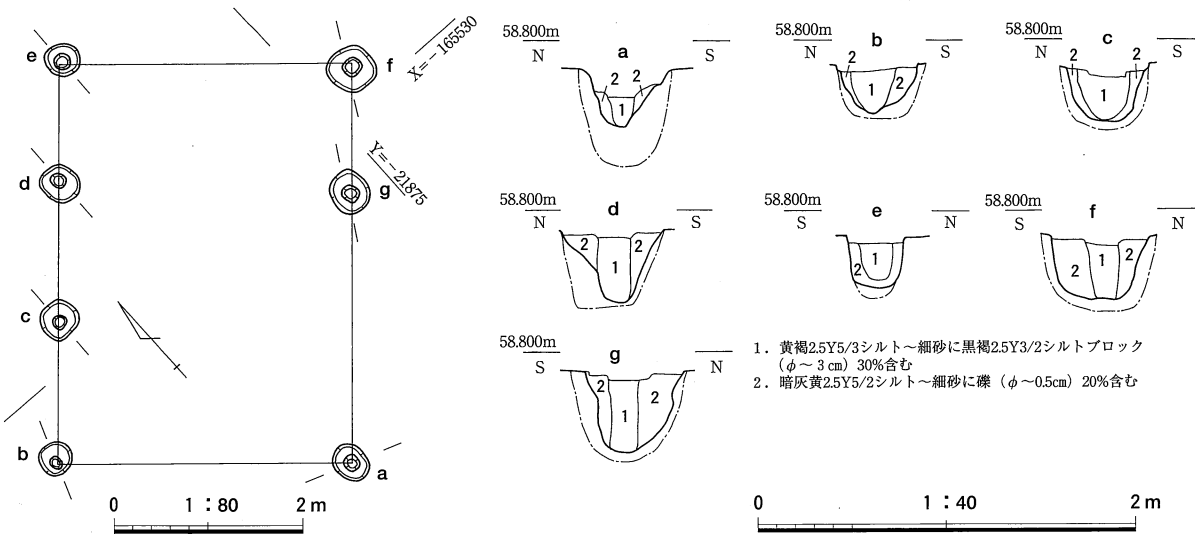


図 7 SB150 平面（S：1/80）・土層断面図（S：1/40）

している。16 に施されている円孔は上下に位置する２つを除いて貫通していない。

出土した土器の年代より、弥生時代中期後半には機能しており、弥生時代後期後半に埋没したと考える。

土坑

SK045（図８・10 － 18）

AO － ７区において検出された土坑である。平面形は円形を呈し、直径約 1.1 ｍを測る。底部断面形態はＵ字形を呈し、深さ約 0.75 ｍである。埋土は概ね２層からなり、上層より灰色砂、暗褐色シルトである。埋土の様相より、湛水状態で半分ほど埋没した後、浅く残った窪みに水流による堆積で完全に埋没したものと考えられる。３層上面では網代状の炭化物を検出した。

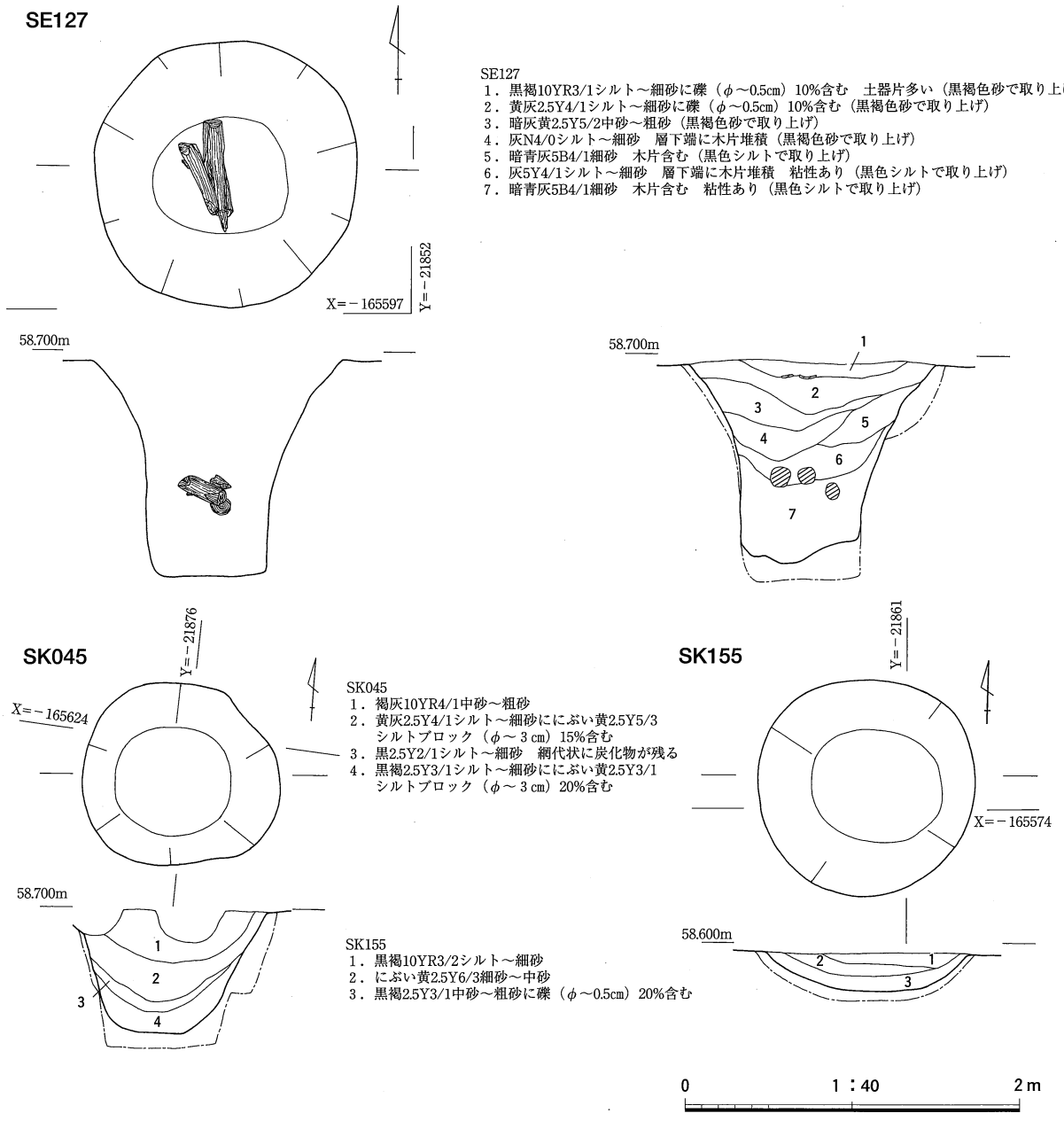


図８　SE127・SK045・155 平面・土層断面図（S：1/40）

遺物の出土はほとんどみられず、暗灰色シルトより壺の体部（18）が出土したのみである。出土した土器の年代より古墳時代前期に機能していたと考える。

SK155（図8・10 - 19、20）

AM～AN - 4区において検出された土坑である。平面形は円形を呈し、直径約1.3 mを測る。底部断面形態はU字形を呈し、深さ約0.2 mである。埋土は概ね3層からなり、上層より黒褐色シルト、黄色砂、黒褐色砂である。埋土中より出土した甕体部片（19、20）より、弥生時代後期に機能していたと考える。

溝

SD001（図9・11 - 21）

AF～AG - 23区において検出された溝である。南半は調査区外のため、全形は不明である。幅約0.9 mを測る。底部断面形態は浅いU字形を呈し、深さ約0.1 mである。埋土は黒褐色シルトである。

遺物は図示している甕口縁部（21）が出土している程度で全体的に少ない。出土した土器の年代より、弥生時代後期末には機能していたと考える。

SD040（図21）

AH～AN - 6～17区において検出された溝である。座標北から約25度西へ振れる方向で斜行し、南端は調査区の東側へ、北端は調査区の北側へと伸びている。SR080に先行する。幅は約0.4～0.6 mを測る。底部

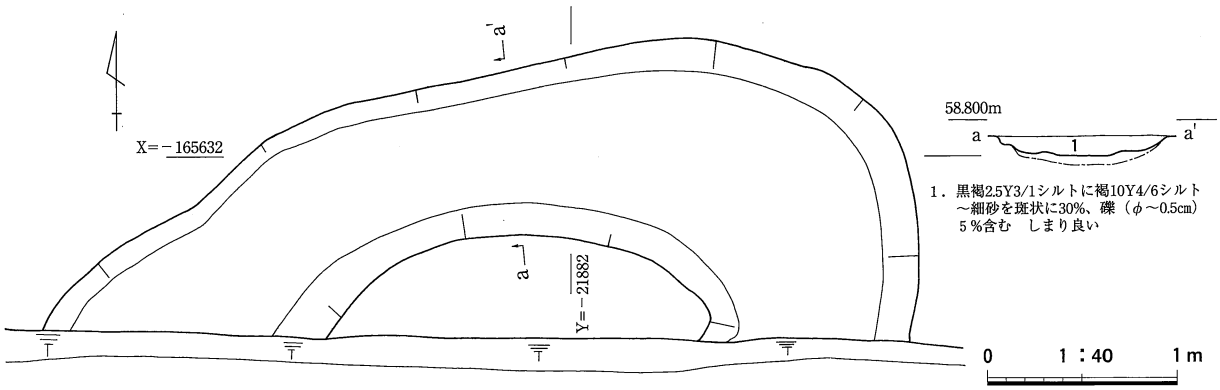


図9　SD001平面・土層断面図（S：1/40）

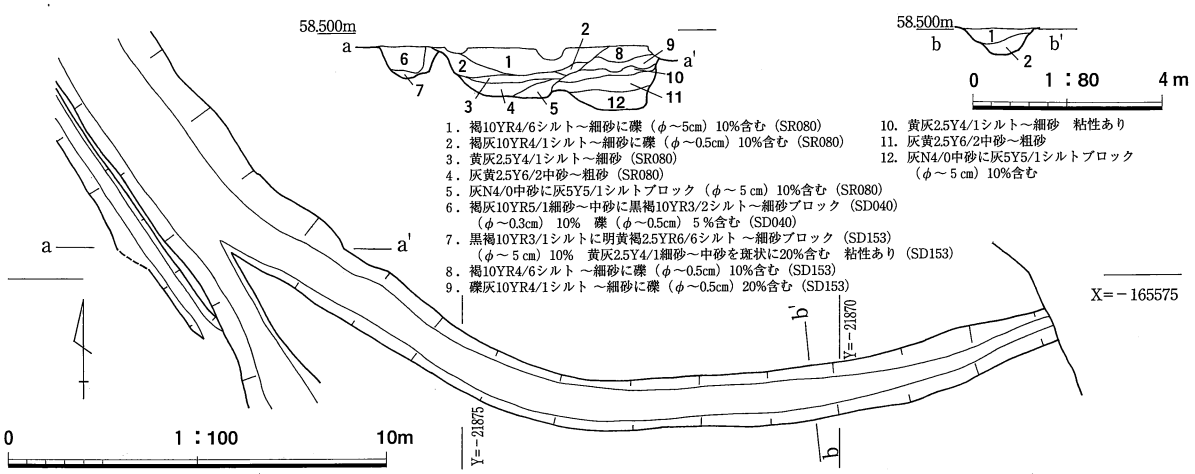


図10　SD153平面（S：1/100）・土層断面図（S：1/80）

断面形態はＵ字型ないし逆台形を呈し、深さ約 0.1 ～ 0.5 ｍであり、北へ向かうにつれ深くなる。埋土は概ね１層からなり、黒褐色シルトであり、上層には地山土のブロックを多く含み、下層は粘土質となっている。このため、掘削後、湛水状態で短期間機能した後に、埋め戻されたことが想定される。

遺物が出土しなかったため時期は不明だが、SR080 に先行することから、弥生時代後期を遡る遺構と考えられる。

SD153（図 10・11 － 24）

AH ～ AK － ４～５区において検出された溝である。南側に張り出した弧状を呈し、東端を SR080、西端を

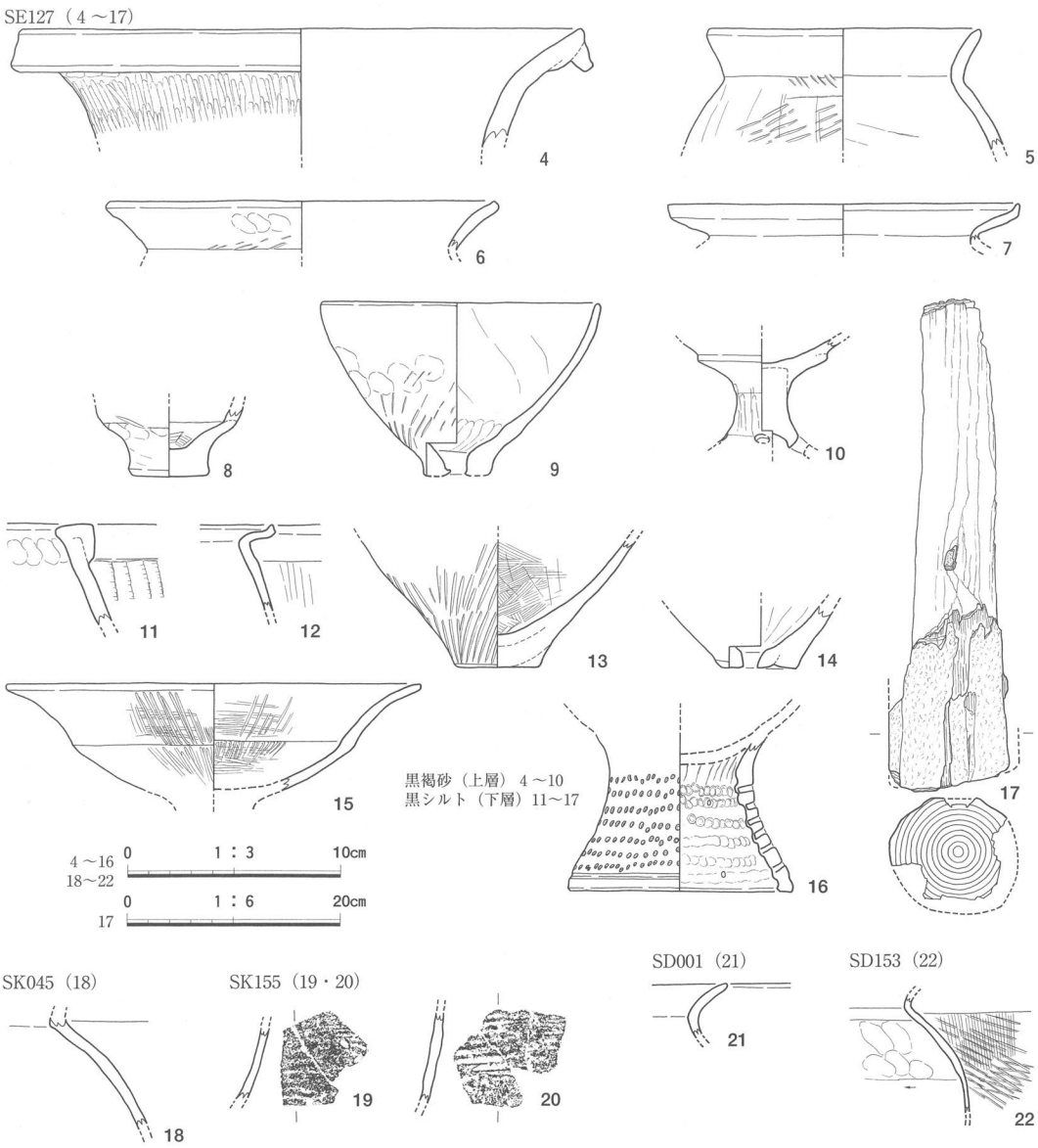


図 11　SE127・SK045・155・SD001・153 出土遺物実測図（S：1/3・1/6）

SR140により壊されている。幅は約0.7～1.0mを測る。断面形態はU字形を呈し、深さ約0.9mである。埋土は概ね粗い砂層で構成され、流水状態での埋没が想定できる。

調査区内で見られる流路等とは全く異なった平面形を呈するため、何らかの人為的造成を推測させるが、性格については不明である。

遺物は甕体部片（24）が出土している程度で全体的に少ない。出土した土器の年代より、弥生時代後期末には機能していたと考える。

自然流路

SR010（図19）

AB～AF－13～17区において検出された流路である。調査区の南西より流れ込み、SR044・049と離合集散しながら北側に蛇行した後、北端はSR020に合流する。幅は約1.0mを測る。底部断面形態はU字形を呈し、深さ約0.3mである。埋土は概ね2層からなり、上層より灰白砂、青灰砂である。いずれの層も粗砂を主体とし、流水状態で堆積したことが窺える。遺物はほとんど出土していない。SR020に先行することから、これと同時期か、若干先行して機能していたものと想定される。

遺物は出土していないが、埋没の前後関係より弥生時代後期以前に機能していたと考える。

SR020（図12－23～36・図19）

AC～AL－7～23区において検出された流路である。調査区の南方より流れ込み、AC・AD－13・14区付近で二股に分岐し、調査区の北西へと流れ出している。分岐点付近では淵状に深さを増している。幅は約2.5～5.5mを測る。底部断面形態はU字形を呈し、深さ約0.7～1.1mである。埋土は概ね3層からなり、上層より黄灰色シルト、暗灰色砂、青灰色粘土である。埋土の様相より、流れの穏やかな時期のあった後、流水状態での堆積を経て、比較的流れの穏やかな状態で埋没したものと想定される。

各層より土器が出土しているが、特に分岐点付近であるAD・AE－14～16区の淵状落ち込みに堆積する青灰砂層から多く出土した。土器の中には、ほぼ完形で出土しているものもある。同地点が淵状に落ち込んでいる理由は、この位置が下層のSR145との交差点にあたり、流路の基盤となる地面が砂質を呈しているため、水流によって抉られたためと考えられる。

遺物は、黄灰色シルトより甕（23）、高杯（24）、暗灰色砂より甕（25、26）、高杯（27）、サヌカイト剥片（36）、青灰シルトより壺（28～30）、甕（31、32）、把手付鉢（33）、高杯（34、35）が出土している。28は頸部以上は完存しており、胴部以下を故意に打ち欠いた可能性がある。30の壺体部の外面には3条の連続山形紋、5条の連櫛紋、2条の連続山形紋が施され、赤彩の痕跡がみられる。

出土した土器の年代より、弥生時代後期末～古墳時代前期前半にかけて機能していたと考える。

SR030（図12－37～41・図19）

AD～AN－5～18区において検出された流路である。調査区の南東から流れ込み、斜行しながら調査区の北西へと流れ出す。SR070・156に後出し、SR095・154に先行する。幅約0.8～1.4mを測る。底部断面形態はU字形を呈し、深さ約0.4～0.6mである。埋土は概ね2層からなり、上層より黄灰色シルト、暗灰色砂である。埋土の様相より、流水状態での堆積の後、比較的流れの穏やかな状態で埋没したものと想定される。SR095に直交する位置関係から、これより確実に先行するものと想定される。

遺物は上層の黄灰色シルトより壺（37、38）、下層の暗灰色砂より、壺口縁部（39）、杭（40、41）が出土している。

出土した土器の年代より、弥生時代後期後半から末にかけて機能していたと考える。

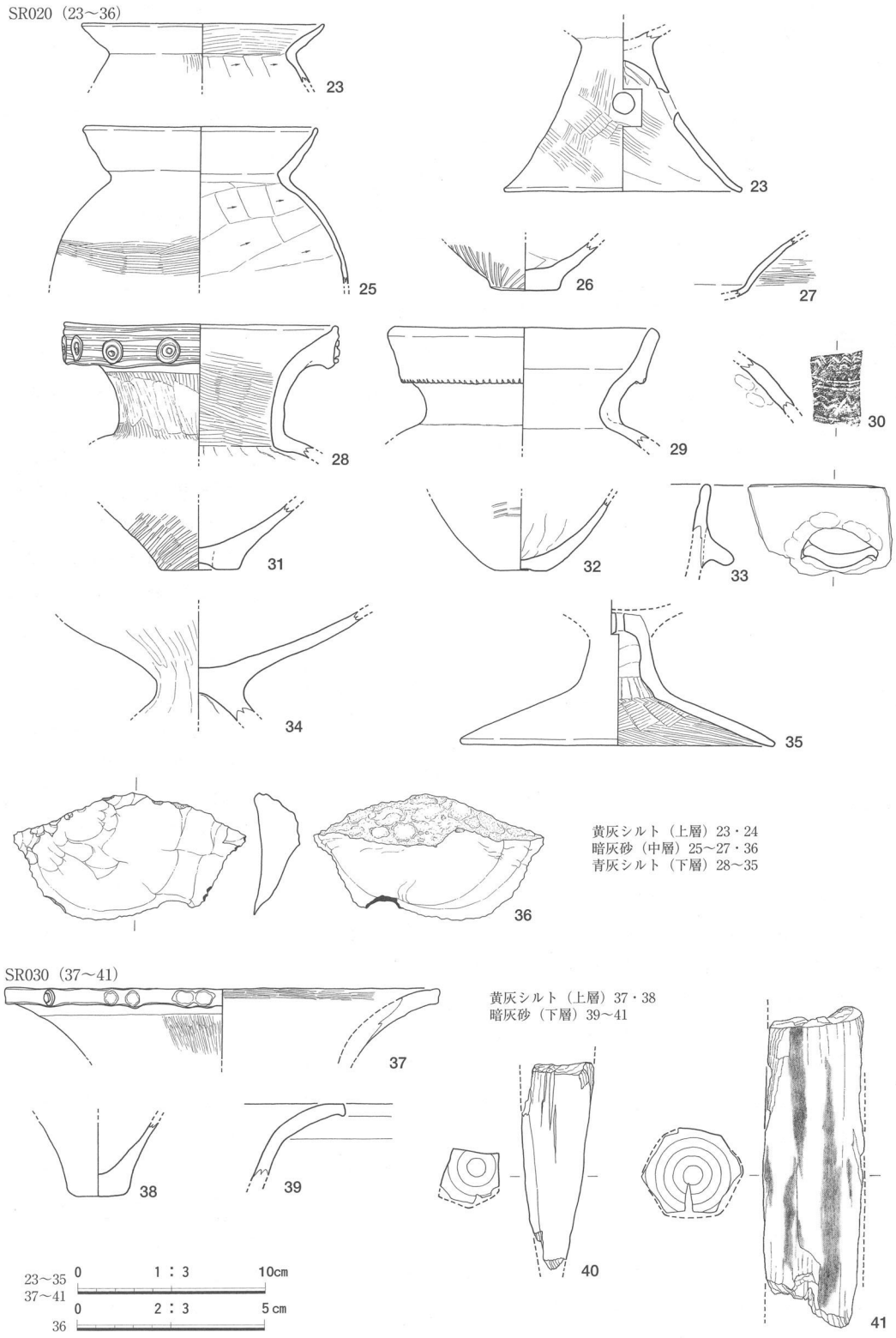


図12　SR020・030出土遺物実測図（S：1/3・2/3）

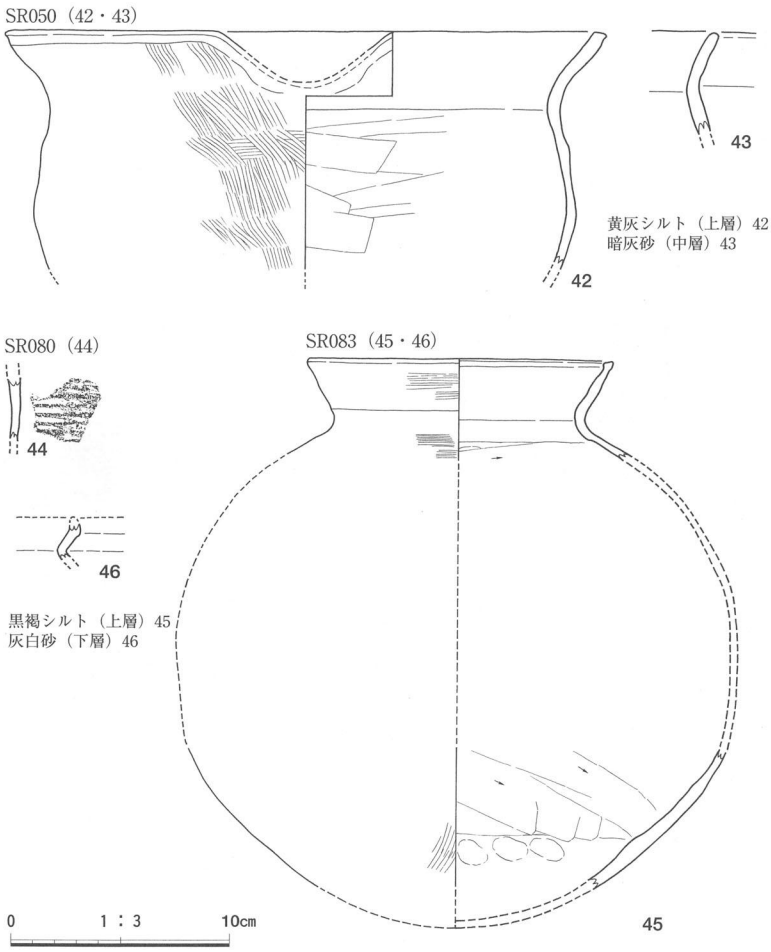


図 13　SR050・080・083 出土遺物実測図（S：1/3）

SR050（図 13 - 42、43・図 19）

AH ～ AN - 18 ～ 19 区において検出された流路である。調査区の東側から流れ込み、AH・AI - 18・19 区付近で SR020 に合流する。幅は約 2.0 ～ 2.9 mを測る。底部断面形態はＵ字形を呈し、深さ約 0.4 ～ 0.5 mである。埋土は概ね３層からなり、上層より黄灰色シルト、暗灰色砂、青灰色シルトである。埋土の様相より、流水状態での堆積が想定される。最終埋没は SR020 が後であるものの、切り合い部分の断面観察より、同時並存していた時期もあったと考えられる。

遺物の出土は少ないが、上層の黄灰色シルトより片口風の鉢（42）、中層の暗灰色砂より縄文土器深鉢口縁部（43）が出土している。弥生時代後期後半から末には埋没が始まっていたと考える。

SR070（図 14 - 47 ～ 60・図 19）

AD ～ AH - 5 ～ 6 区において検出された流路である。AE・AF - 13 ～ 16 区で SR020 から分岐し、東側に張り出す屈曲を経て、調査区の北側へ流れ出す。SR020 よりの分岐点付近には、淵状の落ち込みが存在する。他の部分に比べて極端に深くなっており、後述する灰白色砂層は、この落ち込みの埋土である。また、落ち込み部分には柵と考えられる丸木杭による構造物が検出された。幅は SR020 よりの分岐点では広いが、概ね約 0.8 ～ 1.5 mを測る。底部断面形態はＵ字形を呈し、分岐点以外での深さは約 0.6 mである。埋土は概ね３層からなり、上層より黄灰色砂、灰褐色砂、灰白色砂である。埋土の様相より、流水状態での堆積が想定される。遺物は淵状落ち込み部分に集中して出土し、土器、木製構造材が多数出土している。SR020 と同じく、土器の中には完形で出土しているものもある。同地点が落ち込んでいるのは、SR020 と同様に、この位置が前述の SR145 との交差点にあたり、流路の基盤となる地面が砂質を呈しているため、水流によって抉られたためと考えられる。

柵は２列で構成されている。東側の列は南北方向に長く、東側の列は東西方向に長い。どちらも、淵状落ち込みが浅くなっている土手部分に流れを遮断する形で敷設されている。柵を構成する杭の遺存状態は良好ではなく、原位置で検出できたのは、打ち込まれている根元部分のみであった。このため上部構造については不明であ

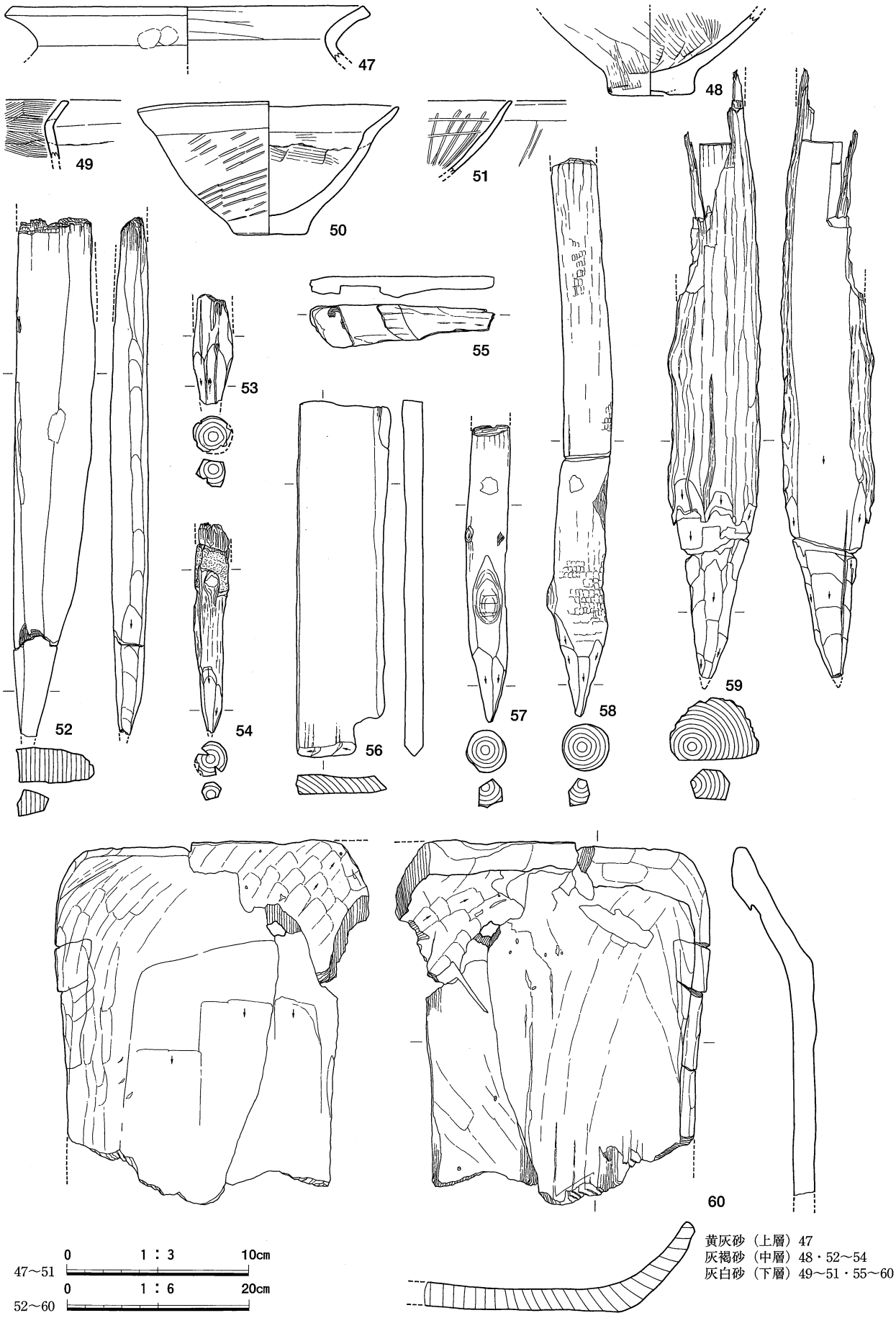


図 14　SR070 出土遺物実測図（S：1/3・1/6）

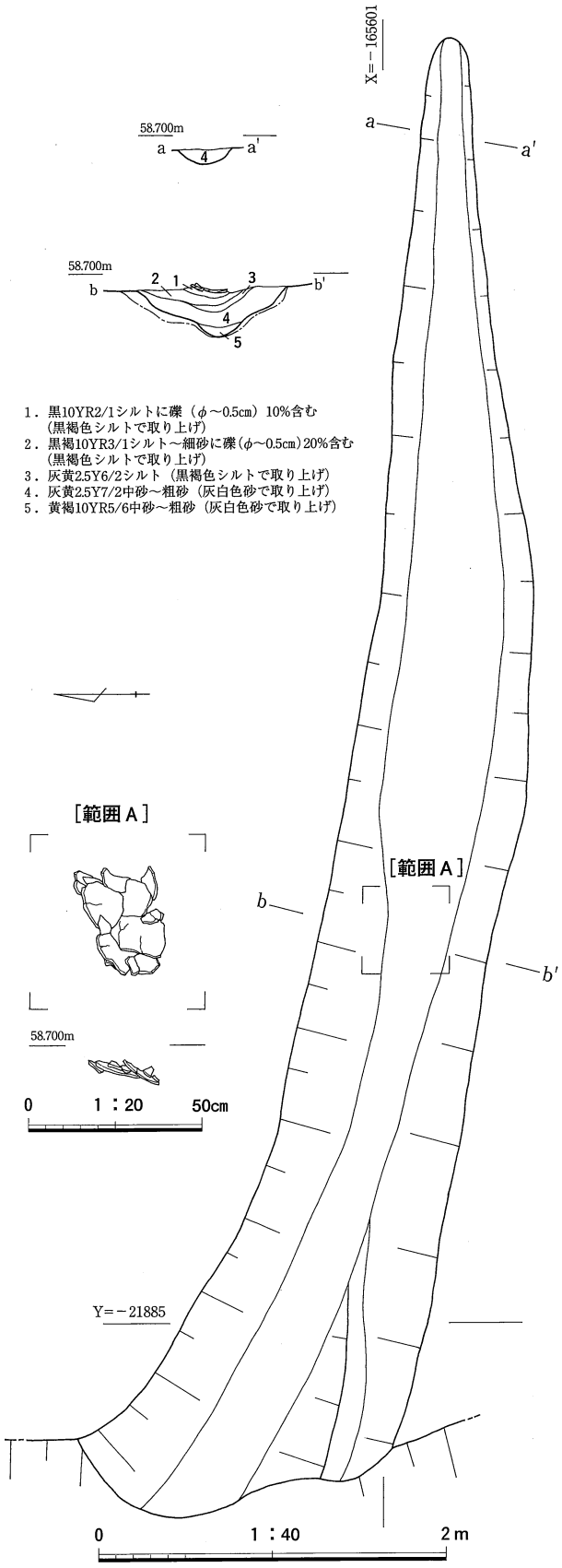


図15　SR083 平面図・土層断面図（S：1/40）
・遺物術土状況図（S：1/20）

るが、東側の杭列では、15㎝程度の丸木を利用した構造材を、杭列とほぼ並行する位置関係で検出した。

遺物は上層より、黄灰色砂より甕口縁部（47）、灰褐色砂より甕底部（48）、杭（52～54）、灰白色砂より甕口縁部（49）、鉢（50）、高杯（51）、木製柄（55）、不明木製品（56）、杭（57～59）、木製槽（60）が出土している。

出土した土器の年代より、弥生時代後期初頭から後半にかけて機能していたと考える。

SR080（図13－44・図19）

AF～AN－2～13区において検出された流路である。調査区の東から流れ込み、北西側へ斜行しながら調査区の北側へ流れ出す。南端部の調査区東壁直下が、ちょうど合流地点になっており、南東側から流れ込んでくる2本の流路がこの位置で合流している。幅は約1.0～1.6ｍを測る。底部断面形態はU字形を呈し、深さ約0.5～0.6ｍである。埋土は概ね2層からなり、上層より暗灰色砂、青灰色砂である。埋土の様相より、流水状態での堆積が想定される。

遺物は甕体部片（44）が出土している程度で少ない。弥生時代後期には機能していたと考える。

SR083（図13－45、46・図15）

AF～AH－13区において検出された流路である。東西に流れており、東端が浅くなって終息しているため、東側より流れ込んでいると考えられる。西端はSR020に先行するが、これは最終埋没時期の違いであり、底部の形状及び断面の観察結果を考慮すると、一定期間同時並存していた可能性が高い。また、SR083のような調査区内で収束する流路が存在することから、検出した遺構面は相当程度削平されていると考えられる。幅約1.0ｍを測る。底部断面形態は浅いU字形を呈し、深さ約0.2～0.3ｍである。埋土は概ね2層からなり、上層より黒褐色シルト、灰白色砂である。

遺物は、上層の黒褐色シルトより、甕（45）、下層の灰白色砂より甕口縁部（46）が出土している。前者は一箇所に破片がまとまって出土していることから、当初は完形に近い状態で埋没したと想定される。

出土した土器の年代より、古墳時代前期初頭には埋没が始まっていたと考える。

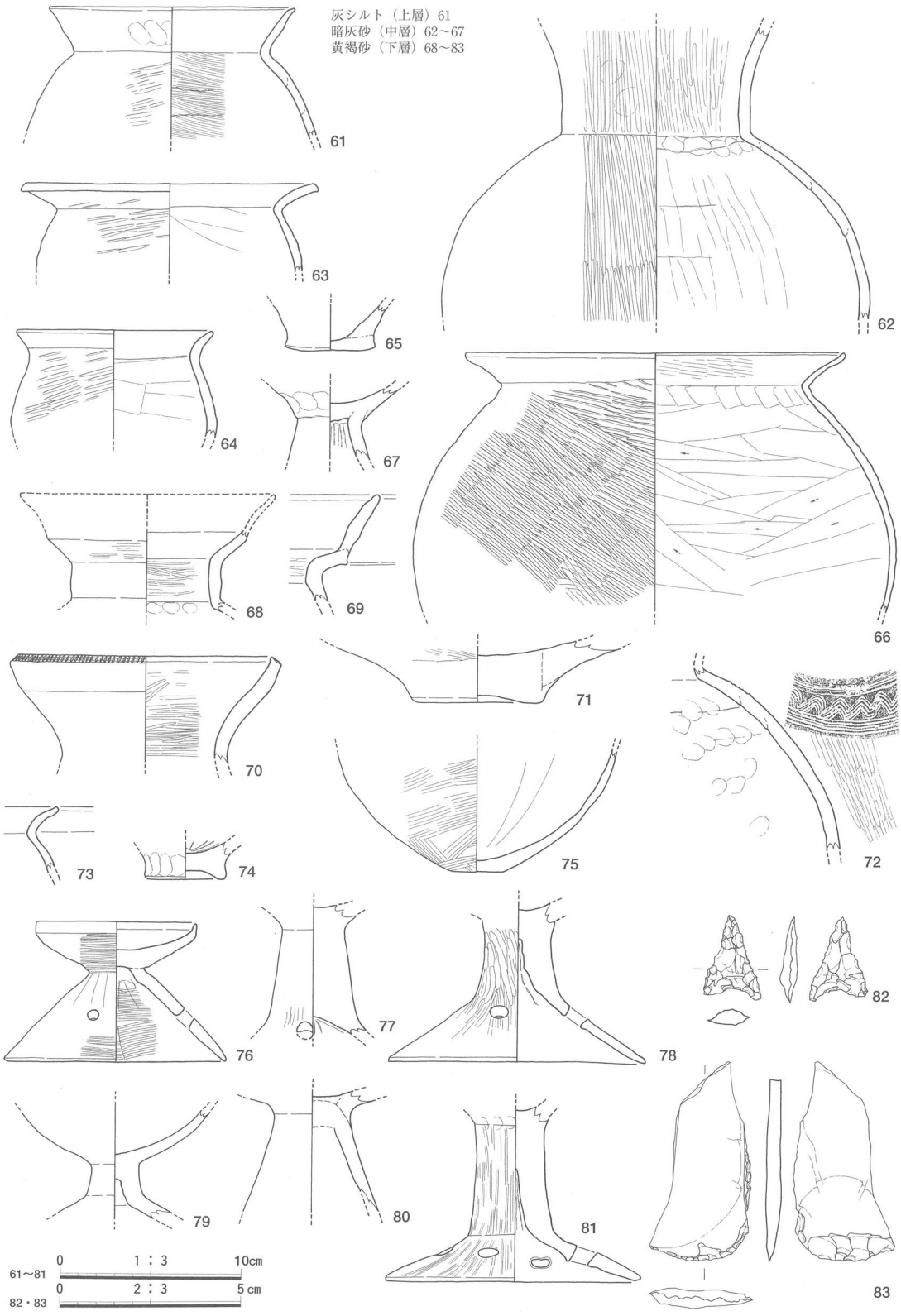


図 16　SR090 出土遺物実測図（S：1/3・2/3）

SR090（図 16 - 61 ～ 83）

AK ～ AO - 2 ～ 12 区において検出された流路である。調査区南側より流れ込み、北西方向へ斜行しながら調査区北側へと流れ出す。SR120・140・134 に後出する。幅は約 2.4 ～ 3.5 mを測る。底部断面形態は U 字形を呈し、深さ約 0.5 ～ 0.7 mである。埋土は概ね 4 層からなり、上層より褐灰色砂、灰色シルト、暗灰色砂、黄褐色砂である。埋土の様相より、流水状態での堆積の後、比較的流れの穏やかな状態で埋没したものと想定される。

遺物は灰色シルトより甕（61）、暗灰色砂より壺（62）、甕（63 ～ 66）、高杯（67）、黄褐色砂より壺（68 ～ 72）、甕（73 ～ 75）、器台（76）、高杯（77 ～ 81）、石鏃（82）、加工痕のあるサヌカイト剥片（83）が出土している。全体的に見ると、底部近くの灰色砂層及び黄褐色砂層中より多くの土器が出土している。また、出土した土器の中には完形のものも含まれる。

SR090 については、流路の主軸が、SR020・040・080 と比べて若干北寄りを志向する。むしろこの主軸傾向は、後述する周溝墓の主軸や、人工溝と考えられる SD040 に近い。また、遺物の出土量も比較的多い。以上のことより、人工の溝、あるいは自然流路ではあるが積極的な人為的利用が行われていた可能性を指摘しておきたい。

出土した土器の年代より、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて機能していたと考える。

SR095（図 17・図 18 - 84 ～ 92）

AC ～ AD - 9 ～ 10 区において検出された流路である。底部のレベルによると、調査区北側より流れ込み、西側へ屈曲して調査区西側へ流れ出す。北端は後続する SR154 により破壊され、下層には SR156 が存在する。幅は約 1.9 ～ 3.5 mを測る。底部断面形態は U 字形を呈し、深さ約 0.4 ～ 0.5 mである。埋土は概ね粗砂で構成され、流水状態での堆積が想定される。

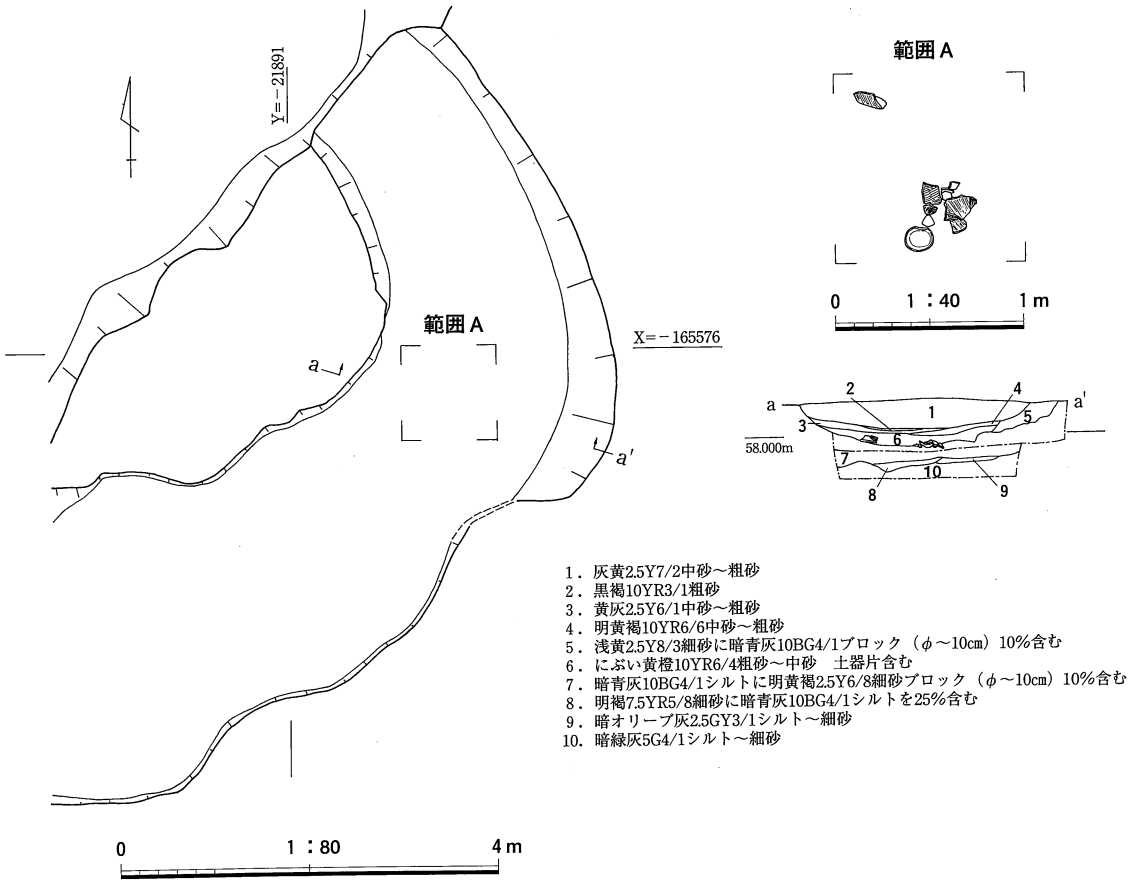


図 17　SR095 平面図・土層断面図（S：1/80）・遺物出土状況図（S：1/40）

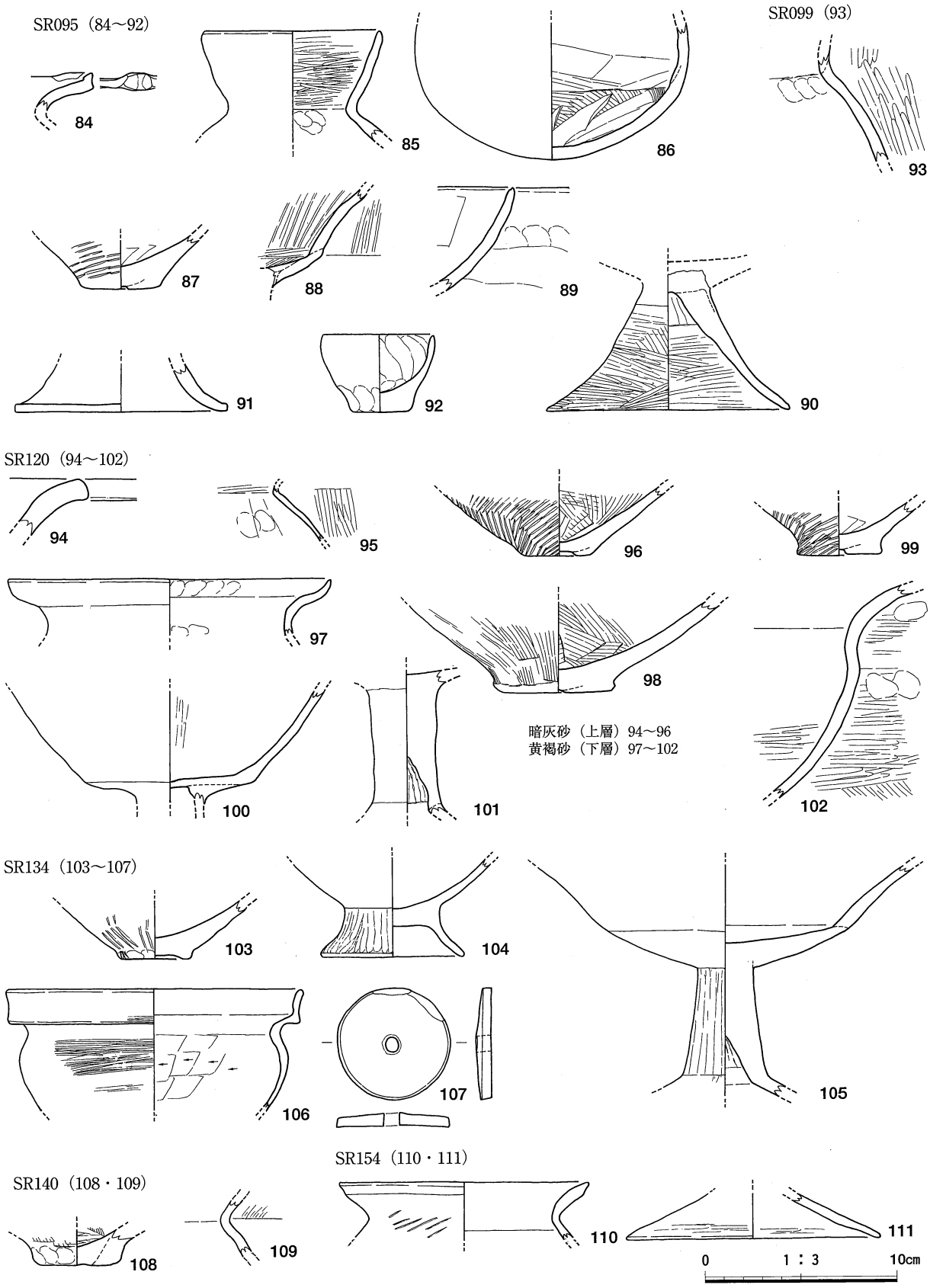


図 18　SR095・099・120・134・140・154 出土遺物実測図（S：1/3）

遺物は壺（84～86）、甕（87）、高杯（88～91）、鉢（92）が出土している。底部付近より比較的多く出土し、溝底部に接した状態で出土しているものもある。冒頭で述べた流路の流入出方向については、土層断面の記録による底部レベルの高低差から導き出したが、調査区内での検出面積は狭く、確定はしがたい。

出土した土器の年代より、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて機能していたと考える。

SR099（図18 - 93・図19）

AC～AE - 7～10区において検出された流路である。調査区西側より流れ込み、北東方向に斜行する。SR020、SR070より古く、SR156より新しい。幅はSR070との接続部分において大きく拡がるが、概ね約3.5mを測る。底部断面形態は浅いU字形を呈し、深さ約0.5～0.7mである。埋土は概ね粗砂で構成されており、流水状態で堆積したことが想定される。土層の断面観察及び完掘後の流路底の観察によると、検出幅の流路が一時期に存在したわけではなく、検出幅の範囲に、小単位の流路が重複を繰り返しながら存在していたであろうと考えられる。また、流露の東端については、SR070により壊されているが、これは切り合い部より北側にかつて存在したであろうSR099旧流路を再利用してSR070が形成されたためと考えられる。

遺物の出土はほとんどみられず、壺体部片（93）が出土したのみである。弥生時代後期以前に機能していたと考える。

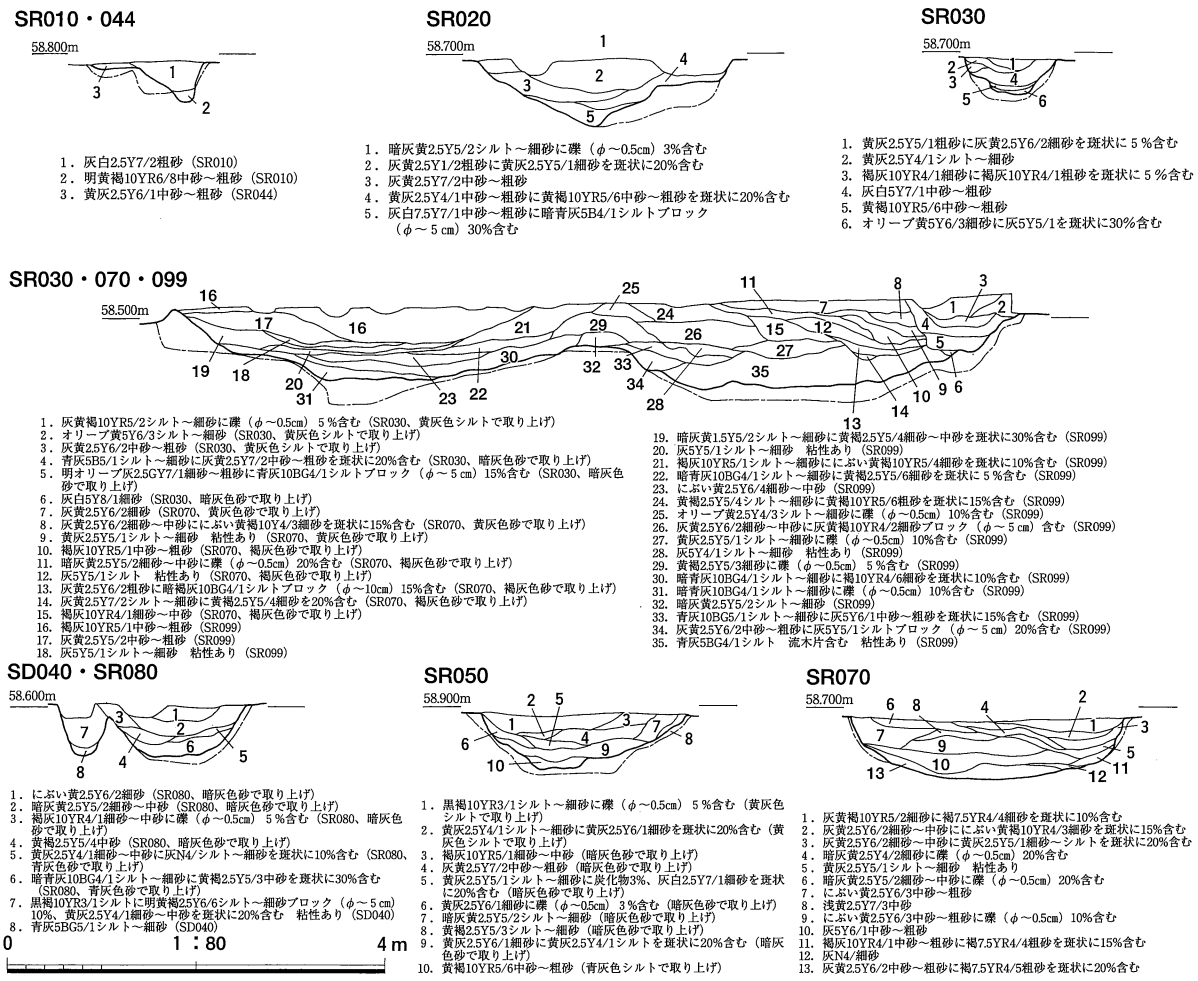


図19　溝・自然流路土層断面図（S：1/40）

SR120（図 18 - 94 ～ 102）

AR ～ AK - ２～８区において検出された流路である。調査区西側と調査区北側が途切れているが、北西方向に大きく斜行する。検出幅約 3.7 mを測る。SR090、SD100、SR140 に先行する。流路の規模が大きいこと、及び掘削を行うと周溝墓 ST100 を破壊してしまうことを考慮して、２箇所にサブトレンチ（トレンチ 1、トレンチ 2）を設けて、底の確認及び堆積状況の確認を行った。その結果、埋土は概ね２層であり、上層から暗灰色砂層、黄褐色砂層である。底部については、地表下約 1.3 mまで掘削を行ったが、湧水が激しいうえに、埋土が砂質であるため、安全面を考慮して確認を断念した。埋土の様相から、流水状態での堆積が想定される。

遺物は暗褐色砂より、壺（94）、甕（95、96）、黄褐色砂より弥生土器甕（97 ～ 99）、高杯（100、101）、鉢（102）が出土した。黄褐色砂層からは、多量の土器が出土し、この出土量がトレンチ 1 の範囲内だけで検出された量であることを考慮すると、かなりの遺物密度が予想される。出土状況は、湧水の激しい砂質層からの出土であったため、明確にはしがたいが、遺構底部あるいは壁からは浮いた状態であった。

出土した土器の年代より、弥生時代後半から古墳時代初頭には機能していたと考える。

SR134（図 18 - 103 ～ 107）

AJ ～ AK - ２～４区において検出された流路である。SR090 から分岐し、北西方向に斜行した後、調査区北側へ流れ出す。幅は約 1.1 mを測る。底部断面形態はＵ字形を呈し、深さ 0.4 mである。埋土は概ね２層からなり、上層より暗灰色砂、黄褐色砂である。埋土の様相より、流水状態での堆積が想定される。最終埋没は SR090 があとであるものの、切り合い部分の断面観察より、同時並存していた時期もあったと考えられる。

遺物は黄褐色砂より甕（103）、（104）、高杯（105）、小型丸底鉢（106）、土製円盤（107）が出土している。106 には内外面ともに赤彩が施されている。

出土した土器の年代より、弥生時代後期末から古墳時代初頭には機能していたと考える。

SR140（図 18 - 108、109）

AL ～ AN - ２～ 12 区において検出された流路である。調査区の東側より流れ込み、北西方向に斜行し、調査区の北側へ流れ出す。SR090・SD100 に先行する。流路の規模が大きいこと、及び掘削を行うと周溝墓 1 を破壊してしまうことを考慮して、２箇所にサブトレンチ（トレンチ 1、トレンチ 2）を設けて、底の確認及び堆積状況の確認を行った。その結果、埋土は概ね粗い砂層で構成される。底部については地表下 1.3 mまで掘削を行ったが、湧水が激しいうえに、埋土が砂質であるため、安全面を考慮して確認を断念した。埋土の様相から、流水状態での堆積が予想できる。

遺物は小片ではあるが壺（108）、甕（109）が出土した。出土状況は、湧水の激しい砂質層からの出土であったため、明確にはしがたいが、遺構底部あるいは壁からは浮いた状態であった。

SR154（図 18 - 110、111）

AC ～ AD - ２～４区において検出された流路である。調査区の北西隅に位置するため、平面形等は不明であるが、北東―南西方向を指向するようである。底部断面形態はＵ字形を呈し、深さ約 1.8 mである。埋土は概ね粗い砂層で構成され、流水状態での堆積が想定される。

遺物は埋土中より小片ではあるが甕（110）、高杯（111）が出土する。検出面は狭いが、底部は非常に深く、かなり大規模な流路の存在が想定できる。

SR156

AC ～ AE - ４～７区において検出された流路である。SR070・099 より分岐し、北西方向に斜行し調査区の西側へ流れ出す。底部断面形態は浅いＵ字形を呈し、深さ約 1.2 mである。埋土は概ね粗い砂層で構成される。遺物が出土していないため、時期等は不明だが、分岐位置から SR070 あるいは SR099 の旧河道と考えられよう。

第３節　古代以降の遺構・遺物

掘立柱建物

SB060（図 20・図 22 － 112）

AB ～ AE － 8 ～ 10 区において検出された掘立柱建物である。建物主軸は東西を指向し、梁行 2 間、桁行 3 間以上である。柱間は梁行・桁行ともに 1.8 ～ 1.9 mであり、概ね 6 尺前後ということが出来る。柱掘方は一辺約 50㎝の隅丸方形を呈し、深さ約 0.15 ～ 0.35 mである。周辺には関連する施設などは確認されず、性格は不明である。

柱掘方より土師器杯（112）が出土しており、それによると 9 世紀末から 10 世紀初頭頃に建造されたと考えられる。

SB130（図 20）

AN ～ AP － 2 ～ 4 区において検出された掘立柱建物である。建物主軸は南北を指向し、梁行 1 間、桁行 3 間以上である。柱間は梁行・桁行ともに 1.8 ～ 1.9 mであり、概ね 6 尺前後ということができる。柱掘方は 1 辺約 40㎝の円形を呈し、抜取穴径は 20㎝前後である。西側へ 1.8 m離れた位置に、柱間を同じくする柱列が確認されており、庇のような構造が推測される。周辺には関連する施設等は確認されず、性格は不明である。

遺存状態が良好な遺物はほとんど出土せず、造営年代は不明であるが、素掘溝に先行することから、中世以前と考えられる。

井戸

SE110（図 21・図 22 － 113 ～ 115）

AS － 7 区において検出された井戸である。掘方の平面形は円形を呈し、直径約 0.8 m、深さ約 0.4 mを測る。掘方底部に接するように直径約 0.4m、残存高約 0.2 mの曲物製井戸枠が設置されている。埋土は概ね 4 層からなり、最上層には井戸枠及び掘方埋土を覆うように褐色砂層が堆積する。井戸枠内埋土は概ね 2 層からなり、上層より灰色粘土層、白色砂層である。掘方埋土は暗灰色砂層である。

遺物は、土器小片が各層より出土しているほか、井戸枠内白色砂層より、頸部以上を欠くものの、体部以下は完形である須恵器壺（115）が出土した。出土状況は井戸底部に直立する形であった。なお、曲物製井戸枠については状態が極めて悪く、観察に耐える状態で取り上げることは出来なかった。

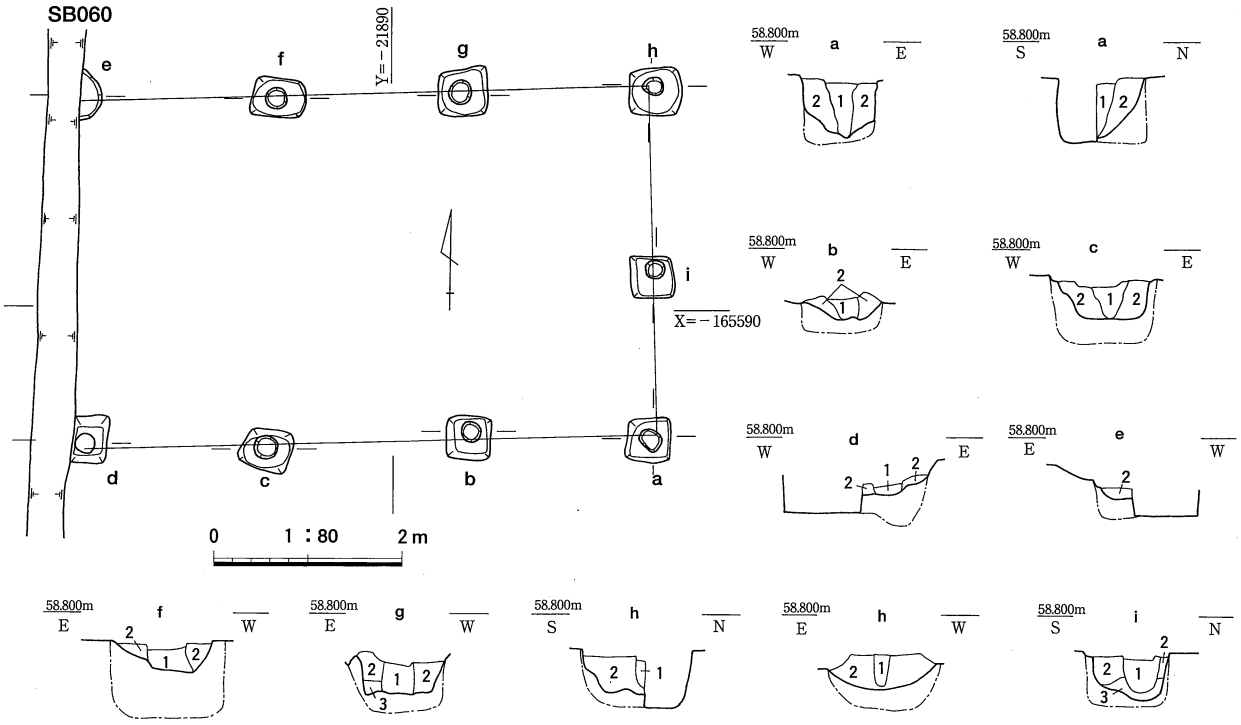
枠内より出土した土器の年代から、9 世紀末から 10 世紀前半に機能していたものと考えることができる。また、枠内底部に直立して出土した須恵器壺の存在は、井戸に関する何らかの祭祀催行の可能性を想定させる。

土坑

SK102（図 21・図 22 － 116）

AH ～ AI － 14 ～ 15 区において検出された土坑である。平面形は方形を呈し、長辺約 3.7 m、短辺約 2.5 mを測る。底部断面形態は浅いＵ字形を呈し、深さ約 0.5 mである。埋土は 1 層からなり、灰色シルトからなる。埋土には地山土のブロックが多く含まれ、埋め戻された様相を示している。

遺物は、埋土中より土器小片が出土したほか、土坑南端寄りの地点から、完形の瓦器椀 1 点が出土した。出土状況は、土坑底部から若干浮いた位置に、口縁部を斜め上方へ向けた状態であった。このことからは、ある程度土坑の埋め戻しが進んだ段階で瓦器椀を配置し、再び埋め戻したという過程が想定される。かなり方形に近い



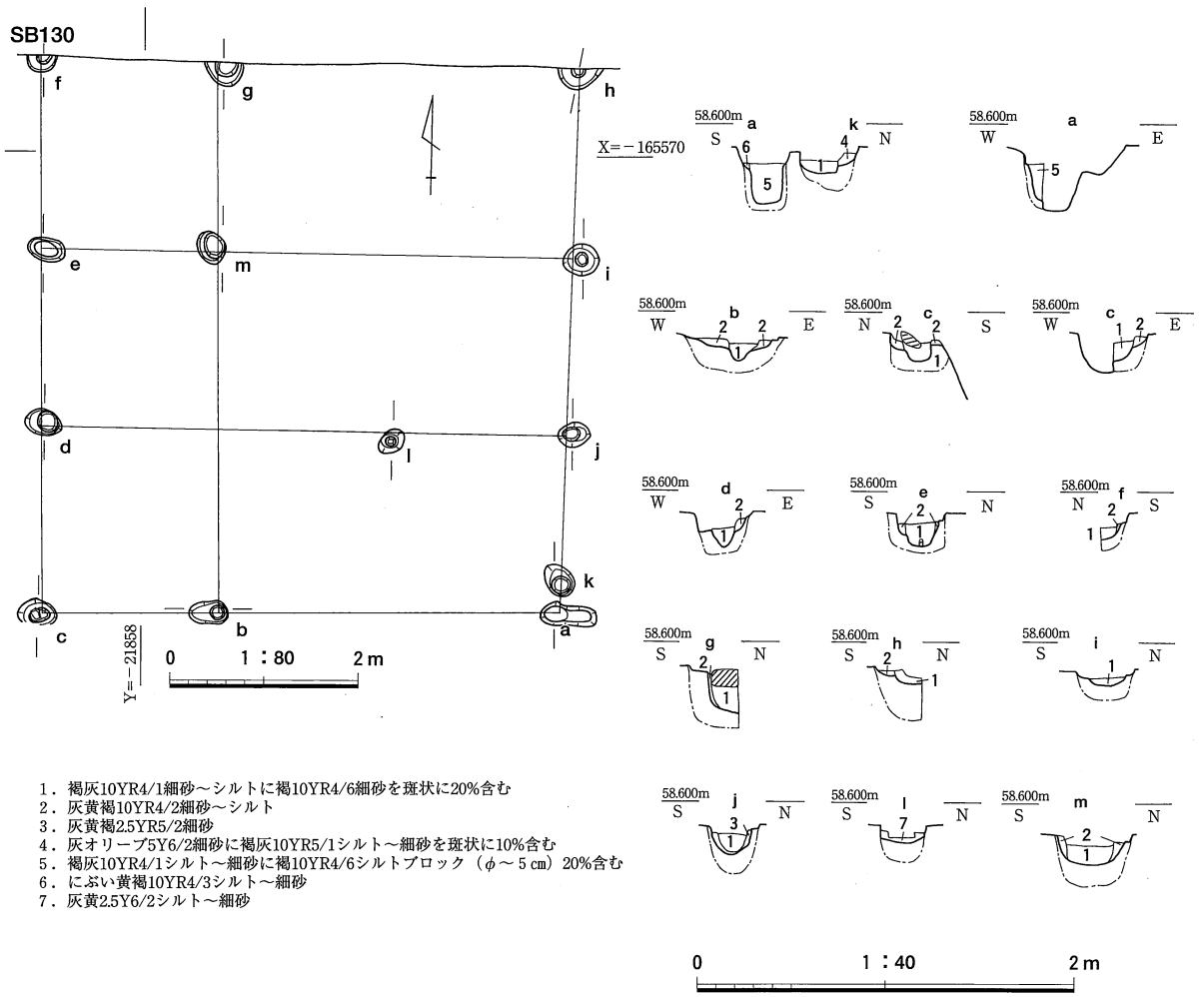


図 20　SB060・130 平面図（S：1/80）・土層断面図（S：1/40）

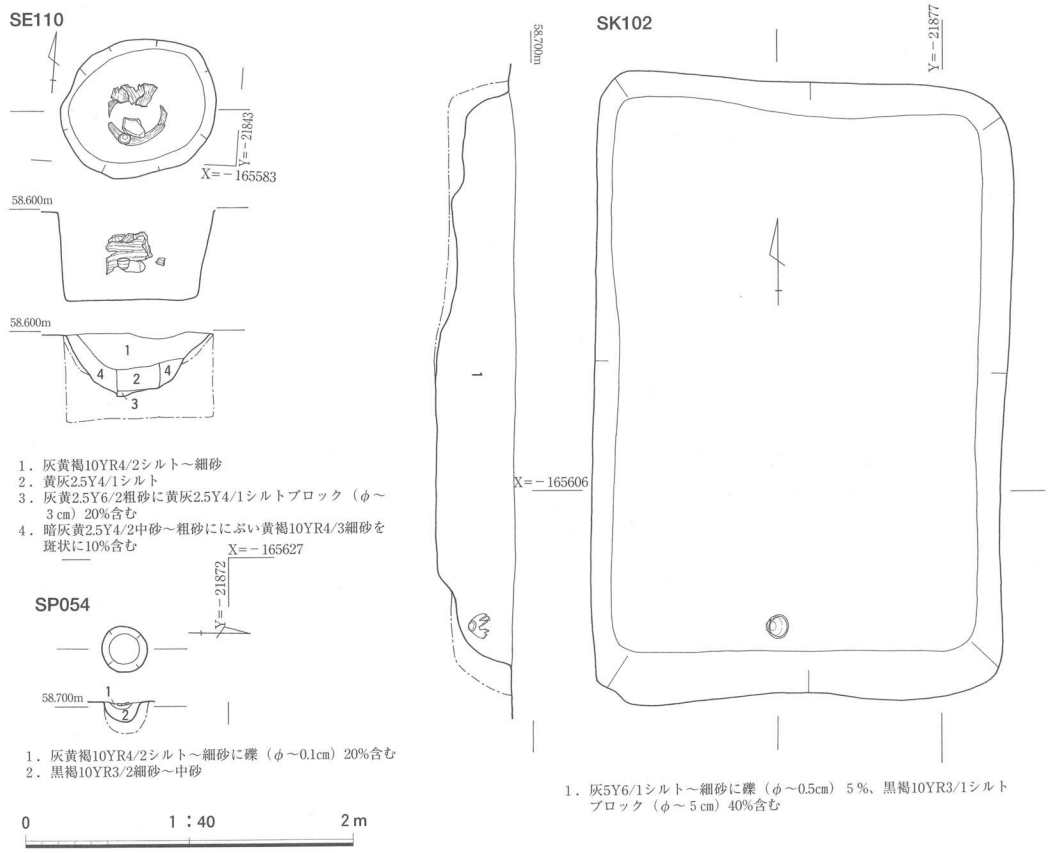


図 21　SE110・SK102・SP054 平面・土層断面図（S：1/40）

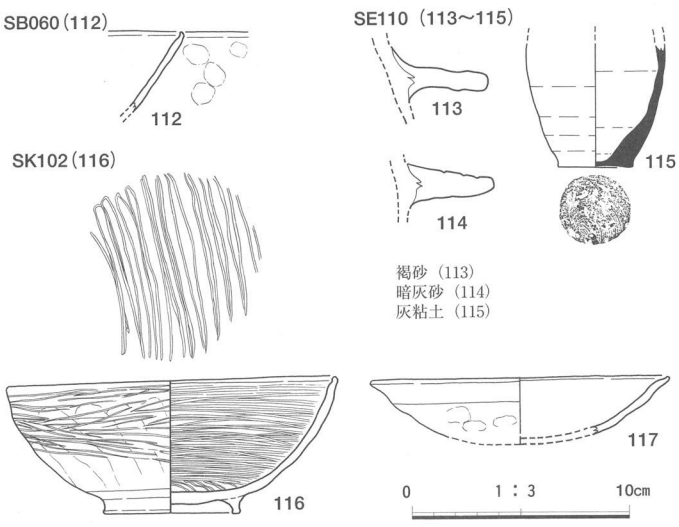


図 22　古代以降出土遺物実測図（S：1/3）

平面形態に、埋め戻しが行われていること、および完形瓦器椀が出土していることは、特徴的であるが、遺構の性格については不明である。

出土した土器の年代より、11 世紀末から 12 世紀初頭に廃絶したものと考えることができる。

ピット

SP054（図 21・図 22 － 117）

AJ － 22 区において検出されたピットである。平面形は円形を呈し、直径約 0.28 ｍである。底部断面形態は逆台形を呈し、深さ約 0.1 ｍである。埋土は概ね２層からなり、上層より

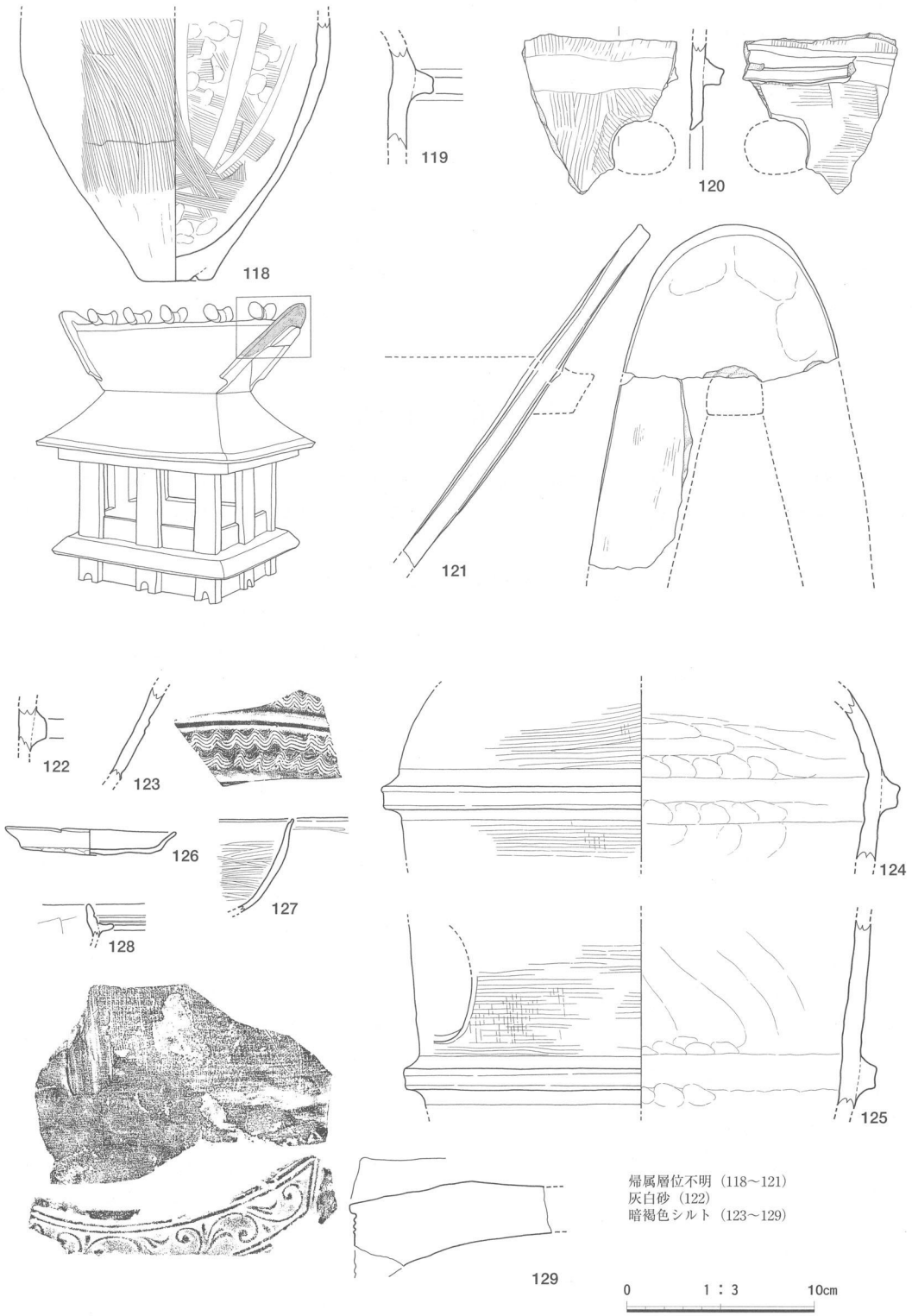


図 23　遺構検出面・包含層出土遺物実測図（S：1/3）

灰色砂、黒褐色砂である。検出面より土師器の杯（117）が出土している。

出土した土器の年代より、10世紀前半には機能していたものと考えることができる。

第4節　包含層出土の遺物（図23）

弥生土器甕（118）、円筒埴輪（120）、家型埴輪（121）は帰属層位が不明である。灰白色砂より、円筒埴輪（122）、暗褐色シルトより須恵器高杯（123）、円筒埴輪（124、125）土師器皿（126）、黒色土器A類椀（127）、瓦器小型釜（128）、軒平瓦（129）が出土している。121は入母屋型屋根の部分の破片である。

家型埴輪や円筒埴輪の存在より、遺構としては存在していないが調査地内もしくは近傍に古墳があったことが示唆される。

第4章　総括

今回の調査では、弥生時代後期の方形周溝墓や弥生時代から古墳時代にかけての流路などを検出した。方形周溝墓は、2004年度調査の調査区西側で検出された弥生時代後期から庄内式期の方形周溝墓群に含まれると考えることができる。本調査区では、方形周溝墓の検出は1基にとどまり、西側には同時期の自然流路が数条検出されている。自然流路の埋没は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて進んでいるため、この方形周溝墓と自然流路は同時期に存在していたこととなる。したがって、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の方形周溝墓域の西は自然流路により限られていると言うことができる。墓域の東側では弥生時代中期の方形周溝墓群が存在しており、これより東に連続するとは考えがたく、2004年度調査の成果を加味すると、この墓域は東西150mの範囲に収まることが分かる。

また一方、2004年度調査区では弥生時代中期に属する方形周溝墓19基が検出されているが、本調査区では検出されておらず、弥生時代中期の墓域が本調査区まで拡がらないことが明らかになった。このことから、2004年度調査のSR550が弥生時代中期の墓域の西側を限っていたものと考えることができる。弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての墓域の決定に当たっては、弥生時代中期の墓域との関係性が意識されたことがうかがえる。

自然流路については、重複して検出されていることもあり、下層にある流路の遺物がまきあげられた結果、出土した遺物は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての比較的長期間に渡っている。大規模なものはなく、比較的小規模なものが進路を変えながら機能していたと考えることができる。また、SR020では杭列が検出され、積極的に利用されていたことも判明した。同様のものは第20次調査でも確認されている。

以上のように、今回の調査では墓域及びそれを取り巻く自然流路について多くの情報を得ることができ、既往の調査の成果も加えると弥生時代から古墳時代にかけて連綿と墓域が営まれたことが判明した。しかしながら、集落域については、曲川遺跡において、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡の調査例は調査面積に比して極めて少なく、第15～17次調査において検出された5棟のみである。これらも弥生時代後期末から古墳時代前期初頭のものであり、弥生時代中期の墓域を築造する母体となる集落跡は確認されていない。今後の調査での解明が待たれる。

関連資料

図 24　検出遺構略則図・遺構仮番号配置図

表 1 ～ 4　掲載遺物一覧（1）～（4）

表 5 ～ 6　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（2）

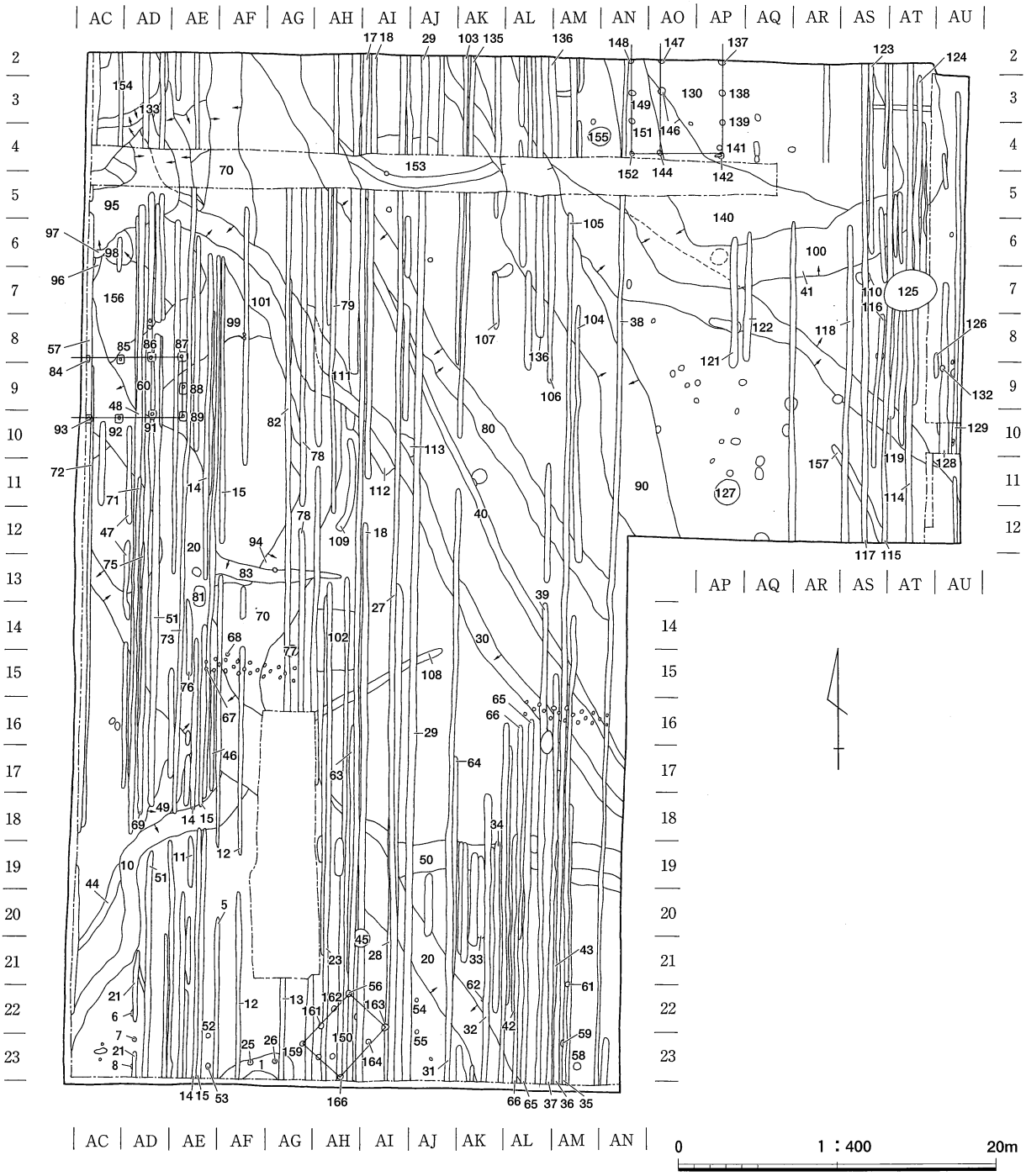


図 24　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図（S：1/400）

表１　掲載遺物一覧（1）

報告番号	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径（cm） 長さ - 幅 - 厚 残存率	胎土	焼成 色調	特徴（調整・文様・形態）	特記事項
1	ＳＴ 100	弥生土器 甕	* - （4.6）-3.9 底部のみ	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 10YR8 ／ 3	（外）体部下半ヨコ方向のタタキをナデ消す 底部付近タタキ残存 （内）ナデ	
2	ＳＴ 100	弥生土器 高杯	* - （4.3）- 脚部のみ	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10YR ７／３	（外）脚柱部タテハケ後タテミガキ 裾部付近に円形の透孔残存 （内）脚柱・裾部ナデ	
3	ＳＴ 100	弥生土器 甕	（16.7）- 22.4-2.0 45%	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 10YR8 ／ 3	（外）口縁部オサエ後ヨコナデ 体部上半ヨコ方向、下半右上がりの平行タタキ （内）口縁部オサエ後ヨコナデ 体部摩滅のため不明だが、下半ヨコハケ残存	内面底部付近に黒斑
4	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 壷	（26.3）-（5.7）-* 20%	やや粗：4㎜以下の石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10YR6 ／ 4	（外）口縁部ヨコナデ、頸部粗いタテミガキ （内）摩滅のため、不明	
5	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 甕	（12.9）-（5.8）-* 15%	やや粗：6㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 灰黄 2.5Y7 ／ 2	（外）口縁部ヨコナデ、頸部タタキ工具のあたり痕 体部上半右上がり平行タタキをナデ消し （内）ヨコ方向のケズリ	
6	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 甕	（18.5）-（2.5）-* 15%	やや粗：2㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10YR7 ／ 3	（外）口縁頸部界にタタキ痕残存 オサエ後、ヨコナデ （内）ヨコナデ	外面煤付着
7	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 甕	（16.6）-（1.9）-* 10%	やや粗：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10YR7 ／ 4	（外）ヨコナデ、口縁端部を上方に摘み上げる （内）ヨコナデ	
8	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 鉢	* -（3.4）-3.6 底部のみ	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄 2.5Y7 ／ 2	（外）底部オサエ後ナデ、一部タタキ痕残存 （内）ヨコ方向のハケ	
9	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 有孔鉢	13.1 -（8.2）-3.2 70%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母	良 浅黄 2.5Y7 ／ 3	（外）体部下半右上がりの平行タタキ痕 底部脇オサエ （内）体部ナデ上げ、底部連続的なオサエ	外面黒斑
10	ＳＥ 127 黒褐砂	弥生土器 高杯	* -（5.7）-* 30%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ ７／４	（外）杯部ヨコナデ、脚柱部タテミガキ 裾部４個の透孔 （内）杯部ナデ、工具痕残存	
11	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 壷	* -（4・8）-* 細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 灰白 2.5Y8 ／ 2	（外）体部上半櫛描簾状文 （内）オサエ後ナデ	
12	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 甕	* -（4.2）-* 細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ ７／４	（外）口縁部ヨコナデ、体部粗いタテハケ （内）口縁・体部ヨコナデ	内外面煤付着
13	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 甕	* -（6.0）-（4.1） 底部のみ	やや粗：4㎜以下の石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ ７／２	（外）体部下半右上がりの平行タタキ痕 底部ナデ （内）底部から体部にヨコハケ後ナデ上げ	外面全体に煤付着
14	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 有孔鉢	* -（3.0）-（3.6） 底部のみ	やや粗：4㎜以下の石英・長石	良 灰白 7・5Y7 ／ 1	（外）底部付近ナデ （内）ナデ上げ	焼成前穿孔
15	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 高杯	（19・6）-（5.1）-* 10%	密：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ ７／３	（外）口縁端部ヨコナデ 杯部上半ヨコミガキ後タテミガキ、杯部下半タテミガキ （内）杯部上半・上半ヨコミガキ後タテミガキ	
16	ＳＥ 127 黒シルト	弥生土器 台付鉢	* -（7.4）-（10.4） 底部のみ	密：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄 2.5Y7 ／ 2	（外）脚台部７段で多数の透孔を連続して穿孔 脚台端部に浅い沈線巡る。 （内）透孔は多くが貫通せずに、瘤状に盛り上がる	
17	ＳＥ 127 黒シルト	木器 加工材	（46.4）- 11.4-（9.5）				芯持ち材
18	ＳＫ 045 暗灰シルト	弥生土器 壷	* -（5・3）-* 肩部片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 浅黄橙 2.5YR7 ／ 3	（外）肩部ナデ （内）肩部ナデ	
19	ＳＫ 055	弥生土器 甕	* -（4・5）-* 体部細片	やや粗：1㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄褐 10YR5 ／ 2	（外）タタキ痕 （内）工具痕残存	
20	ＳＫ 055	弥生土器 甕	* -（3.4）-* 体部細片	やや粗：1㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄褐 10YR4 ／ 2	（外）タタキ痕 （内）ナデ	
21	ＳＤ 001	土師器 甕	* -（2.5）-* 口縁部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 浅黄 2.5Y7 ／ 3	（外）口縁部ヨコナデ （内）口縁部ヨコナデ	
22	ＳＤ 153	土師器 甕	* -（5.7）-* 肩部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 にぶい褐 7.5Y Ｒ ５／４	（外）体部上半左上がりの平行タタキ後 肩部タテハケ （内）肩部オサエ後ナデ 体部下半ヨコケズリ	
23	ＳＲ 020 黄灰シルト	土師器 甕	（13.1）-（3.4）-* 口縁部のみ 30%	密：5㎜以下の石英・長石・雲母	良 明黄褐 10Y Ｒ ７／６	（外）口縁部ヨコナデ 肩部かすかにタテハケ （内）口縁部粗いヨコハケ 肩部ヨコ方向のケズリ	
24	ＳＲ 020 黄灰シルト	土師器 器台	* -（12.7）-（8.4） 脚部のみ 50%	密：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ ７／６	（外）タテハケ後、ナナメ方向のハケ ３方向の円形透孔 （内）部分的にナナメハケ残存 裾部に工具痕残存	
25	ＳＲ 020 暗灰砂	土師器 甕	（12.4）-（8.5）-* 30%	密：5㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ ６／４	（外）口縁部ヨコナデ 体部上半ヨコハケをナデ消し、一部ヨコハケ残存 （内）口縁部ヨコハケ、端部わずかに肥厚 体部上半全面にヨコ方向のケズリ	外面煤付着
26	ＳＲ 020 暗灰砂	土師器 甕	* -（2.7）-3.7 底部のみ	やや粗：4㎜以下の石英・長石	良 灰白 2.5Y8 ／ 1	（外）右上がりのタタキ痕 （内）板状工具によるナデ	外面二次焼成受ける 煤付着
27	ＳＲ 020 暗灰砂	土師器 高杯	* -（3・3）-* 口縁部細片	やや粗：3㎜以下の長石・雲母・クサリ礫	不良 明赤褐 5YR5 ／ 6	（外）摩滅のため不明だが、細いヨコミガキ残存 （内）摩滅のため不明	
28	ＳＲ 020 青灰シルト	土師器 壷	14.6 -（7.0）-* 口縁部のみ 100%	粗：5㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄 2.5Y7 ／ 3	（外）口縁部は凹線施紋後、円形浮文を貼り付け 頸部はタテハケ後、タテ方向のナデ （内）頸部ヨコハケ後、口縁端部付近をナデ消し 肩部にシボリメあり、黒斑あり。	
29	ＳＲ 020 青灰シルト	土師器 壷	（13.8）-（6.3）-* 口縁部のみ 30%	粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 浅黄 2.5Y7 ／ 4	（外）口縁帯下方にキザミメ列点文 （内）口縁部はナデ、肩部はオサエ後ナデ	
30	ＳＲ 020 青灰シルト	弥生土器 壷	* -（3.0）-* 肩部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 浅黄 5Y7 ／ 3	（外）櫛描波状文と櫛描簾状文を交互に配す （内）指オサエ痕	

表２　掲載遺物一覧（2）

報告番号	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径 (cm) 長さ - 幅 - 厚 残存率	胎土	焼成 色調	特徴（調整・文様・形態）	特記事項
31	ＳＲ020 青灰シルト	弥生土器 甕	* - (3.6) -4.4 底部のみ 90%	粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 10YR8／4	(外) 強い右上がりの平行タタキ (内) ナデ	
32	ＳＲ020 青灰シルト	弥生土器 壷	* - (3.9) - (2.9) 底部のみ 50%	密：1㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄 2.5Y7／2	(外) 体部下半に平行タタキ残存 (内) タテ方向のナデ	
33	ＳＲ020 青灰シルト	弥生土器 鉢	* - (5.0) -* 口縁部細片	粗：3㎜以下の石英・長石・チャート	良 浅黄 2.5Y7／4	(外) 口縁部はオサエ後ナデ 口縁部付近にやや下向きの把手を付ける (内) 口縁部はオサエ後ナデ	内面黒班
34	ＳＲ020 青灰シルト	土師器 高杯	* - (6.0) -* 30%	粗：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) 杯部かすかにタテミガキ 脚柱部タテ方向のナデ (内) 杯部不明 脚柱部粘土ヒモ痕跡あり	
35	ＳＲ020 青灰シルト	土師器 高杯	* - (7.1) - (16.6) 脚部のみ 40%	粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 明黄褐 10YR6／6	(外) 脚柱部・脚裾部不明 (内) 脚柱部シボリメ、脚裾部ヨコハケ	
36	ＳＲ020 暗灰砂	石器 剥片	3.4 - 6.2-1.2 重量：18.5				石材：サヌカイト 自然面を残す
37	ＳＲ030 黄灰シルト	土師器 壷	(23.2) - (3.8) -* 口縁部のみ 20%	やや粗：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ７／２	(外) 口縁部に非常に細かいタテミガキ 端面に２個一組の貼り付け円形浮文を巡らす (内) ヨコ方向のハケ 端部をわずかに肥厚させる	口縁部端面の円形浮文は１ヶ所を除いて剥離する
38	ＳＲ030 黄灰シルト	鉢	* - (4.0) -3.0 底部のみ 100%	やや粗：3㎜以下の長石・クサリ礫	良 明赤褐 5YR5／8	(外) 摩滅のため不明、底部付近にヨコ方向のオサエ (内) 摩滅のため不明	ミニチュア製品？
39	ＳＲ030 暗灰砂	弥生土器 壷	* - (4.2) -* 口縁部細片	やや粗：3㎜以下の長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) オサエ後、ナデ (内) ヨコナデ	
40	ＳＲ030 暗灰砂	木器 杭	(11.2) - 4.0- (3.0)				広葉樹・芯持ち材 先端部の加工は４面
41	ＳＲ030 暗灰砂	木器 杭	(17.3) - 5.5- (4.5)				広葉樹・芯持ち材 部分的に薄く樹皮残存
42	ＳＲ050 黄灰シルト	土師器 鉢	(27.6) - (11.0) -* 10%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) 口縁部ナデ、一部タテハケ残存 体部ヨコハケ後タテハケ後ナデ (内) 口縁部ヨコナデ 体部板状工具によるヨコ方向ナデ	片口
43	ＳＲ050 暗灰砂	縄文土器 深鉢	* - (4.8) -* 口縁部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ７／３	(外) ナデ (内) ナデ	
44	ＳＲ080 暗灰砂	土師器 甕	* - (3.1) -* 体部細片	やや粗：0.5㎜以下の石英・長石	良 褐灰 10YR6／1	(外) ヨコ方向の平行タタキ (内) オサエ後ナデ	
45	ＳＲ083 黒褐シルト	土師器 甕	(14.1) - (26.2) -* 口縁部 25%・体部片	やや粗：3㎜以下の石英・長石	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) 口縁部・肩部にかすかにヨコハケ残存 口縁端部は面をもつ (内) 口縁部オサエ後ヨコナデ 肩部・体部下半ケズリ、底部付近オサエ残存	
46	ＳＲ083 灰白砂	土師器 甕	* - (1.8) -* 口縁部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	端部欠損
47	ＳＲ070 黄灰砂	土師器 甕	(22.0) - (3.2) -* 口縁部のみ 25%	やや粗：5㎜以下の長石・クサリ礫	良 にぶい褐 7.5Y Ｒ５／４	(外) 体部下半タテハケをナデ消し 底部中央は浅く窪む (内) 底部くもの巣状ハケ	
48	ＳＲ070 灰褐砂	弥生土器 鉢	* - (4.4) -4.8 脚部のみ 100%	やや粗：4㎜以下の長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ７／４	(外) タテ方向のハケ (内) 粗いくもの巣状ハケ	
49	ＳＲ070 灰白砂	土師器 甕	* - (3.3) -* 口縁部細片	密：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 灰黄 2.5Y7／2	(外) 口縁・体部上部ナデ (内) 口縁・体部上部ヨコ方向のハケ、粘土接合痕	外面口縁部煤付着。
50	ＳＲ070 灰白砂	土師器 鉢	14.4 - 7.0-4.0 ほぼ 100%	やや粗：5㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄 2.5Y6／3	(外) 口縁部ナデ、体部右上がりの平行タタキ (内) 口縁部ナデ、体部全体にナデ、一部ナデ消し前のヨコハケ残存、粘土接合痕	
51	ＳＲ070 灰白砂	土師器 高杯	* - (4.1) -* 口縁部細片	密：1㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 明褐灰 7.5YR7／2	(外) 口縁部ヨコナデ、杯部かすかにタテミガキ残存 (内) 杯部タテミガキ後ヨコミガキ	外面口縁部付近赤色顔料（化粧土）付着。
52	ＳＲ070 灰褐砂	木器 杭	(57.3) - 9.3-4.0			先端部の加工は４面 部材１側面に加工痕残存	芯持ち材 柾目材
53	ＳＲ070 灰褐砂	木器 杭	(12.2) - 4.4- (3.9)			先端部の加工は５面	芯持ち材
54	ＳＲ070 灰褐砂	木器 杭	(13.2) - 4.0-3.9			先端部の加工は６面 部材全面は加工せず、先端部のみ尖らせる	芯持ち材 樹皮残存
55	ＳＲ070 灰白砂	木器 斧柄	(20.4) - (4.8) -*			全体に腐食が著しく、加工痕などは不明	板目材
56	ＳＲ070 灰白砂	木器 加工材	39.3 - 10.2-2.2			部材先端部と考えられる部分にヨコ方向の加工痕 側面にも認められるが、単位などは不明	追柾目材
57	ＳＲ070 灰白砂	木器 杭	(33.0) - 4.9-4.7			先端部の加工は６面	芯持ち材 樹皮残存？
58	ＳＲ070 灰白砂	木器 杭	(61.9) - 6.8-5.2			先端部の加工は６面 部材全面は加工せず、先端部のみ尖らせる	芯持ち材 樹皮残存
59	ＳＲ070 灰白砂	木器 杭	(67.7) - 10.2-7.0			先端部の加工は６面 部材の１面のみ加工し、後は先端部のみ尖らせる	芯持ち材 樹皮残存
60	ＳＲ070 灰白砂	木器 槽	(40.3) - (34.8) -3.3 高：9.9			(外) 底部・体部に粗いタテ方向の加工痕 (内) 口縁端面、体部に粗いタテ方向の加工痕	平面形は隅丸長方形 横木取り
61	ＳＲ090 灰シルト	土師器 甕	13.6 - (7.3) -* 口縁部 90%	やや粗：3㎜以下の長石・クサリ礫	やや不良 にぶい橙 .5Y Ｒ６／４	(外) 口縁部オサエ後ヨコナデ 体部かすかに平行タタキ痕残存 (内) 口縁部オサエ後ヨコナデ、体部ヨコハケ	
62	ＳＲ090 暗灰砂	弥生土器 壷	* - (16.5) -* 頸部 30%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい橙 5Y Ｒ６／４	(外) 口頸部・体部上半タテミガキ (内) 口頸部タテミガキ、体部との接合付近オサエ残存、体部オサエ後タテ方向のナデ、粘土接合痕	
63	ＳＲ090 暗灰砂	土師器 甕	(16.4) - (5.0) -* 口縁部 25%	やや粗：5㎜以下の長石・クサリ礫	良 にぶい褐 7.5Y Ｒ５／４	(外) 口縁部ヨコナデ、一部タタキ痕残存 肩部ヨコ方向の平行タタキ痕 (内) 口縁部ヨコナデ、肩部板状工具によるナデ	

表３　掲載遺物一覧（3）

報告番号	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径 (cm) 長さ - 幅 - 厚 残存率	胎土	焼成 色調	特徴（調整・文様・形態）	特記事項
64	S R 090 暗灰砂	土師器 甕	(11.0) - (6.0) -* 口縁部 20%	密：2㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 6／3	(外) 口縁部ヨコナデ、体部右上がりの平行タタキ痕 (内) 口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ	
65	S R 090 暗灰砂	土師器 甕	* - (2.5) - (5.0) 底部のみ 50%	密：3㎜以下の石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10Y R 6／4	(外) 底部脇オサエ後ナデ (内) ナデ	
66	S R 090 暗灰砂	土師器 甕	(21.2) - (14.6) -* 口縁部 20%	密：2㎜以下の石英・長石・雲母・角閃石	良 にぶい黄 2.5Y6／3	(外)口縁部ヨコナデ､体部強い左上がりの平行タタキ痕､下半の一部にタテハケ残存 (内) 口縁部粗いヨコハケを丁寧にナデ消し 体部何往復もするケズリ	外面体部下半煤付着
67	S R 090 暗灰砂	土師器 高杯	* - (4.1) -* 脚・杯接合部 10%	密：4㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄 2.5Y6／4	(外) 杯部と脚部との接合付近にオサエ痕残存 (内) 杯部ナデ	
68	S R 090 黄褐砂	土師器 壷	* - (4.8) -* 頸部細片	密：1㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 明褐 7.5YR5／6	(外) 部分的にヨコミガキ残存 (内) 頸部ヨコミガキ残存	
69	S R 090 黄褐砂	土師器 壷	* - (6.0) -* 口縁部細片	密：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR6／6	(外) 摩滅のため不明 (内) 頸部付近かすかにヨコミガキ、肩部ケズリか？	
70	S R 090 黄褐砂	弥生土器 壷	14.0 - (6.0) -* 口縁部 60%	密：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 7／3	(外) 口縁端面連続キザミ後、浅い凹線文を巡らす (内) ヨコミガキ	
71	S R 090 黄褐砂	弥生土器 壷	* - (3.5) -7.2 底部のみ 100%	密：2㎜以下の長石	良 灰白 2.5Y7／1	(外) ヨコハケ残存 (内) 工具痕残存	
72	S R 090 黄褐砂	弥生土器 壷	* - (10.3) -* 体部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 7／3	(外) 体部上半全体にタテミガキ、頸部との界線付近に櫛描直線文・波状文・直線文を巡らす (内) オサエ後ナデ、粘土継ぎ目痕跡あり	内面黒色
73	S R 090 黄褐砂	土師器 甕	* - (3.7) -* 口縁部細片	密：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 7／4	(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	
74	S R 090 黄褐砂	土師器 鉢	* - (2.1) -2.2 底部のみ 100%	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 灰白 2.5Y8／2	(外) 底部脇・内はオサエ後ナデ (内) くもの巣状に工具痕残存	
75	S R 090 黄褐砂	土師器 甕	* - (7.0) -2.8 底部のみ 100%	密：2㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 灰黄 2.5Y6／2	(外) 体部下半・底部ヨコ・ナナメハケ (内) タテ方向のケズリ	内・外面煤付着
76	S R 090 黄褐砂	土師器 器台	8.9 - 7.8-12.3 95%	密：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 明赤褐 5YR5／6	(外) 口縁部ヨコナデ、杯部・脚部全体に細いヨコミガキ 脚部中央の透孔は３方向 (内) 杯部は摩滅のため不明 脚部はヨコハケの痕跡、シボリメ残存	
77	S R 090 黄褐砂	土師器 高杯	* - (7.2) -* 脚部片	やや粗：4㎜以下の石英・長石・雲母	良 明赤褐 5YR5／6	(外) 摩滅のため不明、一部タテミガキ残存 (内) くもの巣状に工具痕残存	
78	S R 090 黄褐砂	弥生土器 高杯	* - (8.9) - (14.3) 脚部片	やや粗：2㎜以下の長石・クサリ礫	良 灰黄 2.5Y7／2	(外) 脚柱部タテハケ後タテミガキ 裾部の透孔は推定４方向。 (内) 脚柱部シボリメ痕、裾部オサエ後ナデ	
79	S R 090 黄褐砂	土師器 高杯	* - (6.0) -* 脚・杯接合部片	やや粗：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 浅黄 2.5Y7／3	(外) 摩滅のため、不明 (内) 摩滅のため、不明	
80	S R 090 黄褐砂	土師器 高杯	* - (6.8) -* 脚・杯接合部片	やや粗：1㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 7／4	(外) 杯部工具痕残存。脚柱部ナデ (内) 脚柱部ナデ	
81	S R 090 黄褐砂	弥生土器 高杯	* - (9.8) -14.1 脚部のみ 100%	やや粗：4㎜以下の石英・長石	良 にぶい橙 7.5Y R 6／4	(外) 脚柱・裾部タテ方向のミガキ 裾部の透孔は６方向 (内) 脚柱部シボリメ痕、裾部オサエ後ナデ	黒斑あり
82	S R 090 黄褐砂	石器 石鏃	2.3 - 1.7-0.5 重量：1.0　100%			背・腹面押圧剥離	石材：サヌカイト 凹基無茎式
83	S R 090 黄褐砂	石器 剥片	(5.5) - 2.7-0.6 重量：8.6				
84	S R 095	弥生土器 壷	* - (2.0) -* 口縁部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄褐 10YR6／2	(外) 口縁端面に円形に窪む。浮文の剥落した痕か？ (内) ヨコナデ	
85	S R 095	土師器 壷	(9.2) - (5.8) -* 口縁部 30%	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y R 7／6	(外) 摩滅のため不明 (内) 口縁部ヨコミガキ、肩部オサエ	
86	S R 095	土師器 壷	* - (7.2) -* 底部片	密：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y R 7／4	(外) 体部下半は、ナデ (内) ヨコハケ後、放射状にナデ上げる	
87	S R 095	弥生土器 甕	* - (12.8) - (4.2) 底部のみ 50%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 淡橙 5YR8／4	(外) やや右上がりの平行タタキ (内) 板状工具痕	
88	S R 095	土師器 高杯	* - (5.2) -* 杯部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石	良 浅黄 2.5Y8／3	(外) 杯部上半細いタテミガキ、下半摩滅のため不明 (内) 杯部上半細いタテミガキ、下半ヨコ・タテミガキ	
89	S R 095	土師器 高杯	* - (5.4) -* 杯部細片	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫・チャート	良 灰黄 2.5Y7／2	(外) 口縁部ヨコナデ、体部上半オサエ後ナデ (内) 工具痕残存、口縁端部に細い沈線巡らす	
90	S R 095	土師器 高杯	* - (7.4) -12.7 脚部のみ 80%	密：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 淡黄 2.5Y8／3	(外) 脚部ヨコミガキ、一部にミガキ前の粗いタテハケ残存 杯部との破断面に棒状工具によるオサエ痕残存 (内) 脚部全体にヨコハケ、裾部付近ナデ消し	
91	S R 095	土師器 高杯	* - (2.6) - (11.1) 脚部のみ 10%	粗：2㎜以下の石英・長石・雲母	良 橙 5Y R 6／6	(外) ナデ (内) ナデ	
92	S R 095	土師器 鉢	5.9 - 4.1-3.0 70%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母	良 灰黄 2.5Y6／2	(外) 体部ナデ、底部付近オサエ (内) 指ナデ上げ	ミニチュア製品？
93	S R 099	弥生土器 壷	* - (6.3) -* 肩部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 5Y R 6／6	(外) 肩部タテ方向のミガキ (内) 肩部ナデ、口縁部との継目付近に指オサエ痕	
94	S R 120 暗灰砂	土師器 壷	* - (3.0) -* 口縁部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y R 7／6	(外) 口縁部ヨコナデ (内) 口縁部ヨコナデ	
95	S R 120 暗灰砂	土師器 甕	* - (3.0) -* 肩部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母	良 浅黄 2.5Y7／3	(外) 肩部タテハケ (内) 口縁部ヨコハケ、肩部オサエ、タテ方向のナデ	
96	S R 120 暗灰砂	土師器 甕	* - (3.7) -3.8 底部のみ 100%	やや粗：3㎜以下の石英・長石	良 にぶい黄橙 10Y R 7／3	(外) 体部下半強い右上がりの平行タタキ痕 (内) くもの巣状ハケ	内面煤付着
97	S R 120 黄褐砂	土師器 甕	(16.9) - 3.0-* 口縁部 10%	密：1㎜以下の石英・長石・雲母	良 にぶい黄橙 10Y R 7／4	(外) 口縁部ヨコナデ、端部は内湾ぎみに立ち上がる (内) オサエ後、ナデ	

表４　掲載遺物一覧（4）

報告番号	出土遺構 層位	種別 器種	口径 - 器高 - 底径 (cm) 長さ - 幅 - 厚 残存率	胎土	焼成 色調	特徴（調整・文様・形態）	特記事項
98	ＳＲ 120 黄褐砂	弥生土器 甕	* - (4.8) -* 底部のみ 100%	やや粗：6㎜以下の石英・長石・雲母・チャート	良 灰白 10Y Ｒ８／２	(外) 体部下半強い右上がりの平行タタキ痕 (内) 粗いくもの巣状ハケ	
99	ＳＲ 120 黄褐砂	弥生土器 甕	* - (2.8) -4.5 底部 100%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・チャート	良 浅黄橙 10Y Ｒ８／３	(外) 体部下半強い右上がりの平行タタキ痕 (内) 底部工具痕	
100	ＳＲ 120 黄褐砂	土師器 高杯	* - (6.0) -* 杯部片	やや粗：4㎜以下の石英・長石・角閃石	良 灰黄褐 10Y Ｒ５／２	(外) 杯部ナデ (内) 杯部タテミガキ	内面杯部黒斑
101	ＳＲ 120 黄褐砂	土師器 高杯	* - (7.6) -* 脚柱部片	やや粗：5㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) 杯部・脚柱部ナデ (内) 脚柱部シボリメ痕	
102	ＳＲ 120 黄褐砂	土師器 鉢	* - (11.3) -* 体部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石・雲母・チャート	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ７／４	(外) 体部下半タテハケ後、体部上半・口縁部ヨコミガキ (内) 口縁部付近摩滅のため不明。体部下半ヨコミガキ	
103	ＳＲ 134 黄褐砂	弥生土器 甕	* - (3.1) -3.8 底部のみ 75%	やや粗：3㎜以下の長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい黄橙 10Y Ｒ６／４	(外) 体部下半タテ方向の平行タタキ痕。底部オサエ (内) ナデ	
104	ＳＲ 134 黄褐砂	土師器 台付鉢	(10.4) - (4.9) -7.5 45%	やや粗：4㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい赤褐 5Y Ｒ４／４	(外) 杯部下半摩滅のため不明。脚部タテミガキ残存 (内) 杯部摩滅のため不明。脚部ナデ	
105	ＳＲ 134 黄褐砂	土師器 高杯	* - (12.2) -* 70%	やや粗：5㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) 杯・脚柱部摩滅のため、不明 杯部わずかに段がみられる (内) 杯部ナデ。脚柱部にシボリメ痕	
106	ＳＲ 134 黄褐砂	土師器 小型丸底鉢	(15.4) - (6.4) -* 15%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ６／６	(外) 口縁部ナデ、一部ヨコミガキ、体部は密なヨコミガキ (内) 口縁部摩滅のため不明、ミガキか 体部ヨコケズリ	赤彩あり
107	ＳＲ 134 黄褐砂	土製品 紡錘車	5.9 - 5.9-0.8 100%	密：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ６／４	全面ナデ	焼成前穿孔
108	ＳＲ 140	土師器 甕	* - (3.1) -* 頸部細片	やや粗：2㎜以下の石英・長石	良 灰白 5Y8／２	(外) 口縁部ヨコナデ (内) 肩部タテハケ	
109	ＳＲ 140	土師器 壷	* - (1.9) - (4.6) 底部のみ 10%	やや粗：4㎜以下の石英・長石	良 暗灰Ｎ３／０	(外) 底部・底部付近工具痕 (内) ハケ後、ミガキ	
110	ＳＲ 154	土師器 甕	(13.0) - 3.0-* 口縁部のみ 30%	粗：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 灰白１０Ｙ Ｒ８／２	(外) 口縁端部強いヨコナデ 口縁から肩部にかけて右上がりの平行タタキをナデ消し (内) 口縁・肩部ヨコナデ	内面口縁部煤付着 口縁一部二次焼成を受ける
111	ＳＲ 154	土師器 器台	* - (2.5) - (13.4) 底部のみ 10%	密：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) 裾部ヨコミガキ (内) 裾部ヨコミガキ	
112	ＳＢ 060	土師器 杯(杯Ａ)	* - (3.6) -* 口縁部細片	密：微小砂粒	不良 灰Ｎ４／０	(外) 体部摩滅のため不明 (内) 体部摩滅のため不明 口縁端部細い沈線巡る	
113	ＳＥ 110 褐砂	土師器 土釜	* - (5.5) -* 鍔部細片	やや粗：4㎜以下の石英・長石	良 浅黄橙 10Y Ｒ８／３	(外) ヨコナデ、鍔部は水平にのびる (内) 剥落のため不明	鍔端部煤付着
114	ＳＥ 110 暗灰砂	土師器 土釜	* - (2. 1) -* 鍔部細片	粗：2㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 10Y Ｒ８／３	(外) 鍔部上面に３条の沈線巡る、ヨコナデ (内) 剥落のため不明	
115	ＳＥ 110 灰シルト	須恵器 壷(壷Ｍ)	* - (5.7) -3.5 50%	やや粗：3㎜以下の石英・長石	不良 灰白Ｎ８／０	(外) 体部下半回転ナデ、底部回転糸切り痕残存 (内) 回転ナデ	
116	ＳＫ 120	瓦器 椀	15.2 - 6.3-6.3 90%	密：微小砂粒	良 灰Ｎ４／０	(外) 体部のヨコミガキは四分割、ミガキの体部中位まで (内) 体部のミガキはわずかに隙間がみられる 見込みは密な平行暗文	
117	ＳＰ 054	土師器 杯(杯Ａ)	(13.8) - (2.6) -* 25%	やや粗：3㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ７／４	(外) 口縁端部ヨコナデ、体部オサエ後、ヨコナデ (内) ヨコナデ　口縁端部を小さく玉縁状に肥厚させる	
118	包含層 層位不明	弥生土器 甕	* - (11.4) -4.0 底部のみ 100%	密：2㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 灰黄 2.5Y7／２	(外) 体部下半タテハケ、底部付近ナデ消し、底部剥離 (内) 体部下半オサエ後ヨコハケ後タテ方向にナデ上げ	
119	包含層 層位不明	埴輪 朝顔形埴輪	* - (5.5) -* タガ部細片	やや粗：3㎜以下の長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) 凸部は比較的高い、ヨコナデ (内) ヨコナデ	
120	包含層 層位不明	埴輪 円筒埴輪	(8.7) - (8.3) -1.8 タガ部細片	やや粗：3㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 明赤褐 5YR5／６	(外) タテハケ後ヨコハケを施すと考えられる (内) 凸帯部裏はオサエ後ヨコ方向のナデ、タテハケ	円形透孔の一部残存
121	包含層 層位不明	埴輪 家形埴輪	(18.5) - (13.2) -1.4 破風板上部部分	密：4㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 にぶい橙 7.5Y Ｒ７／４	(外) 破風板はタテハケが残存、上端部はオサエ後ナデ (内) 丁寧なナデ	
122	包含層 灰白砂	埴輪 円筒埴輪	* - (2.5) -* タガ部細片	やや粗：6㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) 凸帯は低くやや下向きに貼り付ける (内) ナデ	
123	包含層 暗褐シルト	須恵器 器台	* - (5.0) -* 杯部細片	密：2㎜以下の長石・黒色粒	良 灰：Ｎ４／０	(外) ２条の凹線文と２条の櫛描波状文を交互に配す (内) 回転ナデ	
124	包含層 暗褐シルト	埴輪 朝顔形埴輪	* - (9.2) -* 肩部片	やや粗：4㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5Y Ｒ８／３	(外) 粗いタテハケ後ヨコハケ、凸帯部は幅広い (内) 凸帯部裏はオサエ後ヨコ方向のナデ	126 と同一個体の可能性
125	包含層 暗褐シルト	埴輪 円筒埴輪	* - (10.2) -* 体部片	やや粗：4㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5Y Ｒ８／３	(外) 粗いタテハケ後ヨコハケ、凸帯部は幅広い (内) 凸帯部裏はオサエ後ヨコ方向のナデ 体部はタテ方向にナデ上げ	円形の透孔
126	包含層 暗褐シルト	土師器 皿	9.1 - 1.5-* 90%	やや粗：1㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 橙 7.5Y Ｒ７／６	(外) 口縁部強いヨコナデ、体部指オサエ 口縁端部に粘土紐切り上げ痕 (内) 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	外面底部に、稲モミ痕
127	包含層 暗褐シルト	黒色土器 椀(椀Ａ)	* - (5.0) -* 体部細片	密：1㎜以下の石英・長石・雲母・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5Y Ｒ８／６	(外) 口縁部付近にヨコミガキ残存、体部オサエ後ナデ (内) 体部ヨコミガキ	
128	包含層 暗褐シルト	瓦器 羽釜	* - (1.8) -* 口縁部細片	密：微小砂粒	良 暗灰Ｎ３／０	(外) 口縁部二条の沈線、水平に伸びる短い鍔を貼付け (内) ヨコ方向の工具痕残存	
129	包含層 暗褐シルト	瓦 軒平瓦	瓦当部のみ	密：5㎜以下の石英・長石・クサリ礫	良 青灰５Ｂ６／１	瓦当文様は、脇区に１条の圏線をめぐらす 偏行唐草文と推定 凹部は布目を残すが、端部付近はヨコ方向のケズリ、凸部はタテ方向のケズリが残存する	顎部を欠損する

表５　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S番号	遺構番号	種別	層位	出土遺物	所見	地区
1	ＳＤ001	溝		土師器壷・甕・細片	1→25・26	AF・AG－23
2	遺構検出面			家形埴輪・円筒埴輪		
3	遺構検出面			埴輪細片（前期末？）		
4	遺構検出面			弥生土器壺？		
5	ＳＤ005	素堀溝		弥生土器細片？		
6	ＳＰ006	柱穴			6→21	AD－22
7	ＳＰ007	柱穴				AD－23
8	ＳＰ008	柱穴				AD－23
9	ＳＩ009	柵列			6・7・8で構成	AD－22・23
10	ＳＲ010	流路	灰白砂 青灰砂	弥生土器細片 土師器細片		AB～AF－17～23
11	ＳＤ011	素堀溝		弥生土器細片、土師器細片		AE
12	ＳＤ012	素堀溝		土師器甕片、瓦器椀高台・皿		AF
13	ＳＤ013	素堀溝		弥生土器細片		AG
14	ＳＤ014	素堀溝		土師器甕口縁部・細片	14→15	AE
15	ＳＤ015	素堀溝		土師器盤細片、須恵器椀細片		AE
16	ＳＤ016	素堀溝		須恵器壷細片・土師器細片		AG
17	ＳＤ017	素堀溝		弥生土器細片、土師器皿・甕細片、瓦器椀		AH
18	ＳＤ018	素堀溝		土師器甕細片、須恵器壷		AH
19	ＳＤ019	素堀溝		弥生土器細片		AH
20	ＳＲ020	流路	黄灰シルト 暗灰砂 青灰シルト	土師器高坏・甕・細片 土師器甕・細片多数、石器 弥生甕・壷・高杯・細片多数		AC～AL－7～23
21	ＳＤ021	素堀溝				AD
22	ＳＸ022			弥生土器甕？		AI－08
23	ＳＤ023	素堀溝		土師器細片、瓦器細片、円筒埴輪		AH
24	ＳＸ024			円筒埴輪		AI－10
25	ＳＰ025	柱穴		黒色土器		AF－23
26	ＳＰ026	柱穴				AG－23
27	ＳＤ027	素堀溝		土師器甕、瓦器細片、円筒埴輪		AI
28	ＳＤ028	素堀溝		須恵器壷、土師器細片	28→27	AI
29	ＳＤ029	素堀溝		土師器甕・細片、須恵器甕		AI・AJ
30	ＳＤ030	素堀溝	暗灰砂 黄灰シルト	弥生土器壷・細片 弥生土器細片、土師器細片土師器広口壷・甕・細片		AD～AN－5～18
31	ＳＤ031	素堀溝		弥生土器細片、須恵器甕・皿、土師器皿		AJ
32	ＳＤ032	素堀溝		土師器甕・細片、須恵器細片、土師器皿		AK
33	ＳＤ033	素堀溝		土師器細片		AK
34	ＳＤ034	素堀溝		土師器細片		AK
35	ＳＤ035	素堀溝		土師器細片、土師器皿		AM
36	ＳＤ036	素堀溝		土師器皿・甕・細片		AM
37	ＳＤ037	素堀溝		土師器細片・瓦器椀		AL・AM
38	ＳＤ038	素堀溝		土師器甕・細片		AM・AN
39	ＳＤ039	素堀溝		土師器細片、須恵器壷片		AL
40	ＳＤ040	溝			埋土に地山ブロック多く含む	AH～AN－6～17
41	ＳＸ041		黒シルト	土師器甕・高杯	S100黒シルトより出土	AO－07
42	ＳＤ042	素堀溝		土師器甕・細片		AL
43	ＳＤ043	素堀溝		土師器細片	43→37	AL
44	ＳＲ044	流路			44→10	AB～AC－19～21
45	ＳＫ045	土坑	暗灰シルト 灰砂	土師器甕		AH～AI－20～21
46	ＳＤ046	素堀溝		土師器皿・細片、須恵器壷		AE
47	ＳＤ047	素堀溝		土師器甕・細片、瓦器椀		AC・AD
48	ＳＤ048	素堀溝		土師器甕・細片		AD
49	ＳＲ049	流路		弥生土器細片	49→10→20	AD～AE－17～18
50	ＳＲ050	流路	青灰シルト 暗灰砂 黄灰シルト	弥生土器細片 縄文土器深鉢・細片、土師器甕 土師器甕・壷・細片	50→20	AH～AN－18～19
51	ＳＤ051	素堀溝		土師器椀・細片、須恵器細片、		AD
52	ＳＰ052	柱穴				AE－23
53	ＳＰ053	柱穴				AE－23
54	ＳＰ054	ピット		土師器皿		AJ－22
55	ＳＰ055	ピット		土師器甕・細片		AJ－22
56	ＳＰ056	柱穴			SB150を構成	AH－22
57	ＳＤ057	素堀溝		須恵器甕、土師器細片		AC
58	ＳＰ058	ピット				AM－23
59	ＳＰ059	ピット		土師器細片		AM－23
60	ＳＢ060	掘立柱建物			2×3間以上	AB～AE－8～10
61	ＳＰ061					AM－21～22
62	ＳＰ062			土師器細片		AK－22
63	ＳＤ063	素堀溝		土師器細片		AH－16～21
64	ＳＤ064	素堀溝		土師器皿・細片	64→35	AJ
65	ＳＤ065	素堀溝		土師器皿・細片		AL
66	ＳＤ066	素堀溝		土師器甕・細片		AL
67	ＳＰ067	ピット		土師器細片		AE－15
68	ＳＰ068	ピット		土師器細片		AF－15
69	ＳＤ069	素堀溝		土師器甕、瓦器椀		AD
70	ＳＲ070	流路	灰白砂 灰褐砂 黄灰砂	土師器甕・鉢・細片　木製品杭・槽・斧柄 土師器甕・高杯・細片　木製品杭・加工材 土師器甕・細片　石器剥片	灰白砂はAE～AG14区の淵状落込埋土 柵２ヶ所	AD～AN－5～16
71	ＳＤ071	素堀溝		土師器細片		AC
72	ＳＤ072	素堀溝		土師器甕・細片		AC
73	ＳＤ073	素堀溝		土師器壷・細片、円筒埴輪		AE－5～16
74	ＳＤ074	素堀溝		土師器甕		AE－5～15
75	ＳＤ075	素堀溝		土師器甕		AD－5～16
76	ＳＤ076	素堀溝		土師器細片		AE－14～15
77	ＳＰ077	ピット		土師器細片		AG－14～15
78	ＳＤ078	素堀溝		土師器甕、須恵器甕		AG
79	ＳＤ079	素堀溝		土師器広口壷	23の続きか？	AH
80	ＳＲ080	流路	青灰砂 暗灰砂	弥生土器細片？、土師器細片 土師器甕・細片	40→80	AF～AN－2～13
81	ＳＫ081	土坑				AE－13
82	ＳＤ082	素堀溝		土師器高坏・細片		AG－5～16
83	ＳＤ083	溝	灰白砂 黒褐シルト	土師器甕 土師器甕・細片	83→20	AF～AH－13
84	ＳＰ084	柱穴			SB060を構成	AC－8
85	ＳＰ085	柱穴	掘方	土師器椀	SB060を構成	AC－8
86	ＳＰ086	柱穴	柱抜取	土師器細片	SB060を構成	AD－8

表6　検出遺構および出土遺物一覧（2）

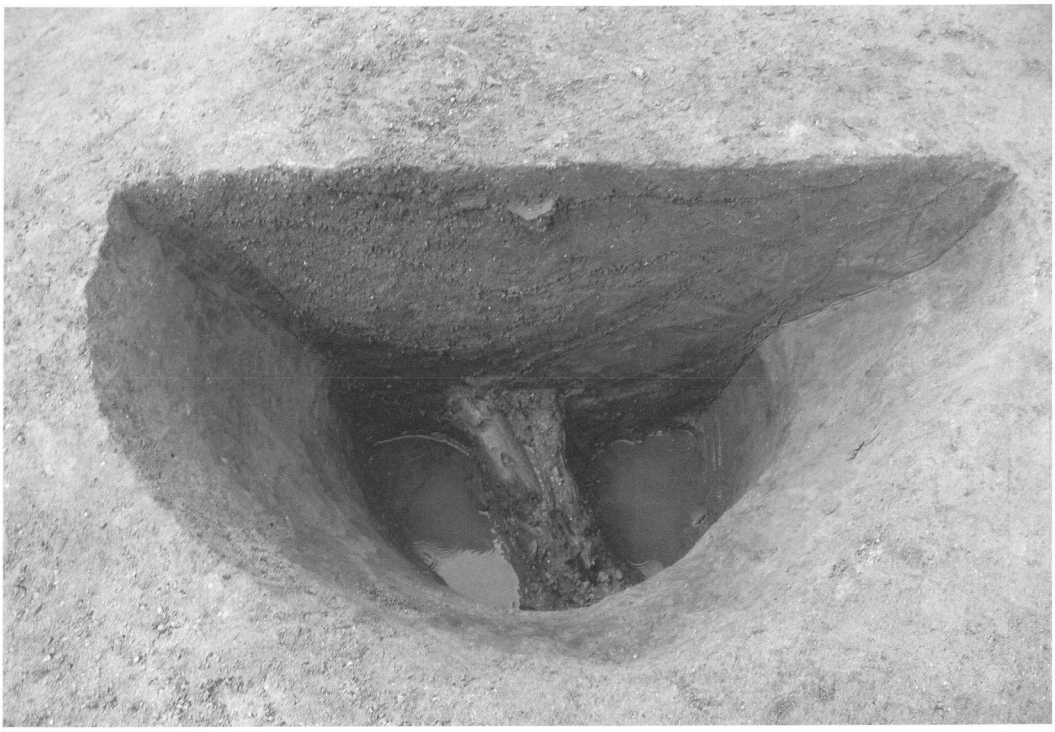
S番号	遺構番号	種別	層位	出土遺物	所見	地区
87	S P 087	柱穴			SB060を構成	AE－8
88	S P 088	柱穴			SB060を構成	AE－9
89	S P 089	柱穴			SB060を構成	AE－10
90	S R 090	流路	黄褐砂 暗灰砂 灰シルト	弥生土器長頸壷・鉢、土師器甕・高杯・器台　石器剥片 弥生土器甕、土師器甕・高杯・細片　石器石族・剥片 須恵器甕・器台・細片	SB060を構成	AK～AD－2～12
91	S P 091	柱穴			SB060を構成	AD－10
92	S P 092	柱穴	掘方	土師器甕、須恵器細片　木製品細片	SB060を構成	AC－10
93	S P 093	柱穴			SB060を構成	AC－10
94	S X 094			土師器甕・細片	遺物出土（S70灰褐砂）	AG－13
95	S R 095	流路		土師器甕・高杯・器台・鉢		AC～AD－9～10
96	S D 096	溝			96→97　S97下層に続く	AC－6～7
97	S K 097	土坑				AC－6
98	S K 098	土坑			98→97	AC－6
99	S R 099	流路		土師器壷		AC～AE－7～10
100	S T 100	周溝墓	灰シルト 黒シルト	土師器甕・高杯・細片 土師器甕・高杯・細片	周濠	AM～AU－2～7
101	S R 101	流路			99→101→70　遺構底はS70に流れ込む	AF～AG－7～11
102	S K 102	土坑		瓦器椀	埋土に地山ブロック多く含む	AH～AI－14～15
103	S D 103	素堀溝				AJ・AK
104	S D 104	素堀溝				AM
105	S D 105	素堀溝		土師器高杯・細片		AM
106	S D 106	素堀溝		土師器壷・細片、円筒埴輪		AL
107	S D 107	素堀溝		土師器細片		AK
108	S D 108	素堀溝		土師器細片		AJ～AH－15～16
109	S D 109	素堀溝				AH－10～12
110	S E 110	井戸	白色砂 灰シルト 褐砂 暗灰砂	須恵器壷、土師器細片 土師器羽釜 土師器羽釜		AS－7
111	S D 111	溝			111→30	AG～AH－7～9
112	S D 112	溝			112→30　111と同じ埋土	AH～AI－10～11
113	S K 113	土坑			113→30　112と同じ埋土	AI～AJ－10
114	S D 114	素堀溝		土師器甕・皿・細片		AT
115	S D 115	素堀溝		土師器細片		AS
116	S D 116	素堀溝		土師器細片		AS
117	S D 117	素堀溝		土師器甕・細片		AS
118	S D 118	素堀溝		土師器甕・細片		AS
119	S D 119	素堀溝		土師器細片		AT
120	S R 101	流路	黄褐砂 暗灰砂	土師器壷・甕・高杯・細片、石器剥片 土師器甕・細片、石器剥片	120→100・90	AJ～AR－2～8
121	S D 121	素堀溝		土師器甕・細片		AP－6～9
122	S D 122	素堀溝		土師器甕・細片、瓦器椀、石器剥片		AQ－6～8
123	S D 123	素堀溝		土師器細片		AS－2～6
124	S D 124	素堀溝		土師器細片		AT－7～9
125	S K 125	土坑		土師器細片、羽釜	野井戸	AT－7
126	S D 126	素堀溝		土師器細片		AT～AU－8～9
127	S E 127	井戸	黒シルト 黒褐砂	土師器甕・高杯・細片 土師器甕・高杯・鉢・細片		AP－11
128	S D 128	素堀溝		土師器細片、羽釜		AU－8～10
129	S D 129	素堀溝		土師器細片		AU－8～10
130	S B 130	掘立柱建物			137～139、141～144、146～149、151、152で構成	AN～AP－2～4
131	S P 131	ピット		土師器細片		AS－7
132	S P 132	ピット			128→132	AU－9
133	S R 133	流路		土師器細片	154の堆積層の一部	AC～AD－2～4
134	S R 134	流路	黄褐砂 暗灰砂	土師器壷・甕・高杯・細片、石器剥片、土製品紡錘車	120→134→90	AJ～AK－2～4
135	S D 135	素堀溝		土師器甕・皿・細片		AK
136	S D 136	素堀溝		土師器甕・細片		AL
137	S P 137	柱穴	掘方	土師器細片	SB130を構成	AP－2
138	S P 138	柱穴	柱根	土師器細片	SB130を構成	AP－3
139	S P 139	柱穴	柱根	黒色土器椀	SB130を構成	AP－3～4
140	S R 140	流路		弥生土器無頸壷・甕・直口壷・細片	120→140	AL～AN－2～12
141	S P 141	柱穴			SB130を構成	AP－4
142	S P 142	柱穴	柱根	土師器細片	SB130を構成	AP－4
143	S P 143	柱穴			SB130を構成	AO－3・4
144	S P 144	柱穴	掘方	土師器細片	SB130を構成	AO－4
145	S R 145	流路			第3遺構面	AG～AS－9～12
146	S P 146	柱穴	柱根	木製品細片	SB130を構成	AO－3
147	S P 147	柱穴			SB130を構成	AO－2
148	S P 148	柱穴			SB130を構成	AN－2
149	S P 149	柱穴	柱根	土師器細片	SB130を構成	AN－3
150	S B 150	掘立柱建物			56、159、161、162、163、164、166で構成	AG～AJ－22～23
151	S P 151	柱穴			SB130を構成	AN－3
152	S P 152	柱穴	柱根	土師器甕・細片	SB130を構成	AN－4
153	S D 153	溝		土師器甕	153→134　153→80	AH～AK－4～5
154	S R 154	流路		土師器甕・高杯・細片		AC～AD－2～4
155	S K 155	土坑		土師器甕		AM～AN－4
156	S R 156	流路			156→30→95→154	AC～AE－4～7
157	S D 157	溝				AR～AS－10～12
158	S P 158	ピット				AR－9
159	S P 159	柱穴			SB150を構成	AG－22
160						
161	S P 161	柱穴	掘方	土師器細片	SB150を構成	AH－22
162	S P 162	柱穴			SB150を構成	AH－22
163	S P 163	柱穴			SB150を構成	AI－22
164	S P 164	柱穴			SB150を構成	AI－22
165						
166	S P 166	柱穴			SB150を構成	AH－23
167		包含層	灰白砂	土師器広口壷・甕・鉢・皿・細片、須恵器細片、瓦質土器細片、円筒埴輪		
168		包含層	暗褐シルト	土師器甕・器台、須恵器高杯・壷・甕、黒色土器椀、瓦器椀、青磁椀、瓦質土器、朝顔形・円筒埴輪、石器剥片		
169		包含層	黒褐シルト	弥生土器細片		

写真図版

調査区全景（南から）

SB150 全景（北東から）

PL.2



SE127 土層断面（南から）

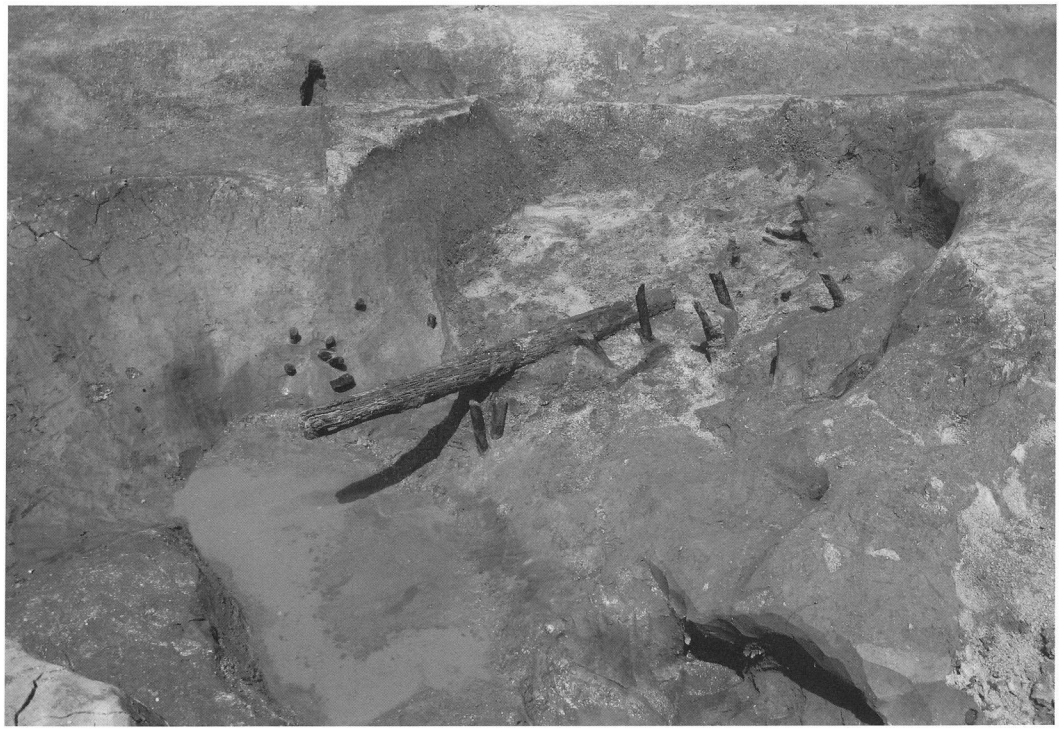
SD153 土層断面（西から）

SR020 土層断面（東から）

SR050 土層断面（東から）

PL.4

SR070 土層断面（南から）



SR070 柵全景（東から）

SR083 土層断面（南から）

SR140 土層断面（南東から）

PL.6

SB060 全景（西から）

SB130 全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	まがりかわいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	曲川遺跡発掘調査概要報告書
副書名	2007年度調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	村田裕介　藤井章徳　佐藤亜聖
編集機関	財団法人元興寺文化財研究所
所在地	〒630-8392　奈良県奈良市中院町11　Tel 0742-23-1376
発行年月日	2009年12月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まがりかわいせき 曲川遺跡	ならけんかしはらし 奈良県橿原市 まがりかわちょう 曲川町	29205		34° 30′ 25″	135° 45′ 42″	20070416 ～ 20070725	2900㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
曲川遺跡	墓域	弥生時代 古墳時代 中世	周溝墓 掘立柱建物 井戸 土坑 自然流路	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 埴輪 木製品	

要約	弥生時代後期末の方形周溝墓を検出。東側の方形周溝墓群に続くものと思われる。また、西側には自然流路を多数検出した。

曲川遺跡発掘調査概要報告書

2007 年度調査

平成 21（2009）年 12 月

（発行・編集）財団法人元興寺文化財研究所

（印刷）㈱明新社